397-259

東西國論素人評

孤山居士（陸軍中將竹內正策）著

（日蓮主義研究）

大正
11. 1. 11
內交

始

周甲誕辰自壽六十一韻

錄舊製代自叙傳

馬齡已及六十一。 鬚髯霜雪漸將密。 慶幸猶受 聖朝恩。 芙蓉峰下徐養疾。 一夜夢回少年時。 內憂外患幕政衰。 勤王志士如雲起。 要復古制開新治。 西南諸藩多豪傑。 遂興禍亂戡定師。 東征北討亙半載。 拮据築成太平基。 吾始從軍丁丑役。 銜枚進衝吉次柵。 月黑風腥夜四更。 雷驅霆擊敵辟易。 踴躍登壘閃劍光。 追北直迫木留驛。 此時飛丸貫膊來。 鮮血淋漓戰袍赤。 凱歸常戴禁城天。 榮官劇職幾回遷。 或執教鞭或史筆。 又參軍政十餘年。 此間在內有何績。 慚吾短才徒備員。 此

間在外爲何事。只勞北馬與南船。吾再從軍征淸戰。經營水陸兵站線。牙山平壤糧運艱。西渡鴨江始得便。中途有故向東歸。戢劍姑爲軍府掾。才非蕭曹參牙營。辯不蘇張對議院。偏期寸毫利我軍。報國丹心不曾變。戰雲忽收暖春風。身荷光榮侍東宮。三年一日九重上。恩波至今尙無窮。一轉何地晁川滸。指揮聯隊效微忠。再遷何地硯海畔。統帥旅團氣更雄。竊恐病軀塞賢路。遂乞骸骨意始融。征露事起又跨馬。進逼旅順虜寨下。虜軍頑强不遽降。砲戰連日山亦赭。殊死攻襲半歲餘。遂奏微功答朝野。實是東洋興廢秋。帷幄豈不畫奇籌。聖勅更編一軍隊。驀然北向樺太洲。快哉始踏驕胡域。況又行動儘自由。皇風所加無立草。一擊碎壘壞城溝。士氣興奮前無敵。再擊長驅擒羌酋。一朝俄傳和議決。凱旋帝京解征裘。解裘邸邂情難已。再辭都門歸舊里。吾未曾富又未貧。有家有食有妻子。現在未來無關心。於是先杜口與耳。頹然自適送餘生。訪花賞月隱于市。雨則圍棊又點茶。晴則登山又泛水。或臨法帖賦詩歌。或閱雜誌新聞紙。談論往々忘主賓。洒掃時々伍僕婢。朝歠牛乳喫麵包。夕傾麥酒煮雞豕。方過耳順顏未皺。知至古稀尙存齒。家庭無規唯喜閒。起

居有節何好侈。竹樹泉石數畝園。書畫筆硯一脚几。曾遇老僧聽玄談。轉覺宇宙存妙理。須在塵外安心身。何要俗界染手指。與其仰天羨鵾鵬。寧宜俯地憐螻蟻。超絶凡流樂天然。世間何物映眼裡。由來人世是假空。骨也肉也不足恃。歸臥早已閲七年。光陰倏忽速於矢。故舊溘亡已幾人。吾亦難免老病死。不願騎鶴到揚州。旦順萬化獨歡喜。

辛亥一月

孤山竹内正策

目次

緒言

一 安國論起草の動機 一

二 安國論の論旨 六

三 佛教の宇宙觀 八

四 天文諸現象と兵亂とは謗法の爲にあらず 一〇

五 日蓮上人時代の學者の迂愚（其一） 一五

六 日蓮上人時代の學者の迂愚（其二） 一九

七 日蓮上人時代の學者の迂愚（其三） 二三

八 日蓮上人の見たる還擇集 二八

九 經は見る人に依りて各其解を異にす 三三

一〇 謗法論 三九

一一 日蓮上人の暴言 四〇

一二 捨閉閣抛と四個格言 四五

一三 後五百歳と傳教大師の空想 五〇

一四 日蓮上人の輕信 五一

一五 日蓮上人の自負 五四

一六 元寇に對する日蓮上人の態度 五七

一九 大風に就て 六三

一八 其後我國の佛教 七三

結論 七九

八二

立正安國論素人評

緒言

吾輩は久しき以前よりの佛教道樂であるが、今以て何宗にも這入らぬ、先以て此のことを告白して置く。

又日蓮上人の安國論に反對する所あるも、さればとて法華經を誹謗する樣な一闡提で無いことも誤解せられぬように請ふて置く。或は云はん、安國論は法華の精神より來る、之に反對するは即ち法華經を誹謗する者であると、夫れは他の評に任す、吾輩は吾輩の信ずる所を以て斯く言ふ。

一次に此の書起草の動機は、大正八年夏林彦明氏が『念佛對法華論』を著されたるとき、吾輩が之に共鳴して忽卒に寄せたる短篇を氏が併せて出版せられたる爲め、圖らずも世に多少知らるゝ所となりたるを以て、之を補足し整理するの要を感じ來つたてある。偶々磯野本精氏ありて吾輩の短篇に向つて駁論(日宗新報に大正十年八月以降)を公にせらる。是に依て吾輩亦多少反駁したき所もあり旁茲に拙なる筆を取ることゝ致したである。讀者諸君請ふ之を諒せられよ。

吾輩が日蓮主義に於ける研究は、數年前に田中智學氏が三保の貝島に最勝閣と云ふものを構築して日蓮主義の講修があるから聽聞して見ぬかと誘ふ人があつて、一二回往て見たが、吾輩に日宗の素養が無かつたので、唯お說卿尤に聞ゆるのみにて、何等不審も起し得ぬ。そこで吾輩は考へた、凡ろ人の說を聞かんには、相當の準備殊には比較研究が無くては、其の人の說が只尤もに聞ゆるのみか、遂には之に感服して其の門下となるに至るである。但し此方に相當の素養ありて、比較研究上優る所あれば無論弟子ともなるべきであるが、何も比較すべき用意も無くして盲目的に弟子となるは、甚以て意氣地無きことであると。乃ち吾輩は暫く聽聞を休み準備研究に取掛たのである。熱心にやつて居ると大正五年の十月に姉崎博士の『法華經行者日蓮』が出版されたので早速購讀すると茲に始めて幼稚なる七八箇條の不審が起つた、仍て之を博士に質した所が、當時博士は取込みのことありて返書を認め兼ぬるとて、短簡なる意見に雜誌人文を二冊添て贈られた。其の厚意は感謝の至りであるが、二冊の雜誌は吾輩の質疑とは格別の關係も無かつた。そこで同一の質問書を今度は田中氏に向けたのであつた。すると田中氏の懇篤なる山川智應、長瀧智大の兩氏を特派して、吾輩の靜岡の宅に就て答辯せしめられた。其の時の問答は半日を費やしたが、尙ほ足らずして爾後山川氏は極めて多忙の中より極めて詳細なる說明書を寄せられたこと一再ではなかつた。其の厚意は吾輩實に感謝に堪へぬのである。其の說明書は吾輩之を熟讀考慮して今尙ほ繰返して居るが、吾輩の研究が進むに連れて、疑團が疑團を生み來りて、今は遺憾ながら氏の說及び日宗諸氏の多くの說にも服し兼ぬる所が多くして、反對の位地に立つの己むを得ざる場合となつたのである。今茲に述べんとする『安國論素人評』も即ち其の反對意見の一である。但し特に一言して置かずではならぬ事は斯く安國論に就て愚見を述ぶるも、日蓮上人の非凡なることは申す迄も無く、中に就ても最も敬意を表すべきは、文永八年十月下旬佐渡の國に流され、彼の如き一坪の廢堂に、彼の如き風雪凜冽の中に、碌々參考書も具備せざる如くにて、然かも翌年の二月迄に開目鈔上下二卷を起草せられた事である。博覽强記精力絕倫の士にあらずんば、到底企て及ぶべからざる所であると思はる。其の外遺文錄中載する所を見るに、博學能文驚嘆に堪へたる次第である。今吾輩が此の偉人に向て敢て愚說を試みんと欲するもの、畢竟此の偉人の研究に際し惹起し來る所の疑團に外ならぬ、即ち筆して上人の叱正を乞はんとするの心持である。故に幸に是正せらるゝを得ば、或は氷解する所もあるであらうと期待するのである。

近來盛に日蓮主義に謳歌する人の說を聞くに、中には或は只日蓮主義の說を聞き、日蓮宗の經論をのみ讀みて、廣く他宗の經論を比較研究せられざるにはあるざるかと、思はるゝふし無きにあら

ず。若夫れ各宗各派に渉つて研究する時は、各相當の理由の存するは勿論、只一併に日蓮上人の說のみ神聖とも思ひ難きに至るは自然であると思ふ。現に今日各宗の學者と云はるゝ人々が、日蓮主義に贊同せらるるの甚だ稀なるに見ても分るではあるまいか。蓋し各宗共に自家の研究に忠實にして、他宗の事に疎なるは自然なるを以て、其の主張亦自ら我田引水的なるは、是亦己むを得ざる所と思ふ。吾輩は前に斷た通り、今以て何宗にも歸投せず、漠然たる通佛教研究道樂であるから、所謂不偏不黨で自然見る所が公平であると信じて居る。吾輩は右の通り全くの道樂的研究であるから又所謂盲目蛇に疑問は疑問、反對は反對と何等憚る所も無く、何等畏るゝ所も無く、固より嗤るゝも呵らるゝも一切搆はず、只言はんと欲する所を言ふのである。

大方の平素娯樂を佛教にとられざる諸君よ、老後の精養には佛教程神心を慰め氣分を爽快ならしむるものなし。而して更に其の奥底の極め盡し難き趣味深きものはあらざる也。吾輩の如き無師獨學無宗無派、只自己免許の釋尊の直門と心得居る者は、亦自らそこに安心立命の堅住するものありて神氣爽然、而して生死に動かす自衛自强、皆是れ佛教に得て曾て日常欝屈を感じたること無く、晨も尙ほ足らず昏も尙ほ足らず、時には東西奔走して抽演を試む。老軀保全の道蓋し是より良きは無しと思ふ。平素佛典に親まれざる諸君、特に我戰友諸君、希くは佛典を繙きて老後の娯樂とせられんことを、佛教者の義務として敢て勸む。

大正十年十一月三日　　孤山居士

附記

本書引く所の日蓮上人遺文は師子王文庫發行の類纂高祖遺文錄に據る、頁數はそれに從ふ。

× × × ×

如來時に、是の衆生の諸根の利鈍、精進懈怠を觀じ、その堪ふる所に隨つて、爲に法を說くこと種々無量にして、皆歡喜し快く善利を得せしむ。この諸の衆生、この法を聞き已て、現世安穩にして、後に善處に生れ、道を以て樂を受け、亦た法を聞くことを得。既に法を聞き已て諸の障礙を離れ、諸法の中に於て力の能ふる所に任せて、漸く道に入ることを得。

（法華經藥草喩品）

一、安國論起草の動機

『立正安國論』は、日蓮上人の數多き著作中に在て、尤も重要なる一書なり。彼宗徒は之を以て正法建立の主張、內訌外患の豫言書と稱へ、之れが基因と爲て三大法難をも受くるに至つたと云へり以て其崇重せらるゝ所以を知るべし。今その書につき批評を試むるに方り、先つその製作の動機を探らうと思ふ。そは安國論勘由來及び同奥書に上人自ら說明して詳なり。乃ちその要處を摘錄すれば。云く

正嘉元年八月前代に超ゆる大地震、同二年八月大風、同三年大飢饉、正元元年大疫病（近世の虎疫ペストに比し如何）同二年四季に亘りて大疫已ます、萬民既に大半を超えて死を招き了る。而る間國主之に驚き內外典に命して種々の祈禱あり、而も一分の驗なく還て飢疫等增長す。日蓮此の間の躰を見て粗々一切經を勘へ、終に勘文一通を作り立正安國論と名付、文應元年七月十六日宿屋の入道に付して故最明寺入道殿に奏進す』云々

建仁年中に法然大日二人の增上慢の者あり、惡鬼其身に入り國中上下を誑惑す、故に叡山守護の天照大神正八幡宮山王七社、國中守護の諸大善神不喰法味捨國土去り了す、惡鬼便りを得て災難を至し、結局他國より此國を破るべき先相と勘ふる所なり。

又其後文永元年七月彗星東方に出てゝ餘光一國に及ぶ、國初より己來無き所の凶瑞なり』云々

（安國論勘由來四二五）

と、是にて安國論上書の由來を知るを得。此書東は上書後九年即ち文永五年四月豫言の的中を喜び、當世天台眞言の祈禱を尽け、日蓮に聽けとの趣意を法鑒房（平盛時入道歟）に贈れるのもなり。日蓮上人は即ち天災地夭の頻々として現れ、飢饉疫病の絕へざるは、邪法の流布し正法の行はれざるに由る所以を、經典に稽へ、之を北條執權に上書したるが、立正安國論なり。敎法と天文人事の關係に執着せる日蓮上人の思想之にて窺ひ知るべし。又　撰時鈔（一四二）に云く

『今の大地震大長星等は國主日蓮を惡みて、亡國の法たる禪宗と念佛者と眞言師を方人とせらるれば、天怒らせ給ふて出させ給ふ所の災難なり』

と、日蓮を惡みたるが故に、地震起り彗星出つと云ふ、之れが、日蓮上人の一生を通じての根本主張にして、安國論の主旨も全く此に在るなり。

二、安國論の論旨

安國論は全篇十段に分れ、主客問答の體に擬して、自己の主張を露骨に告白す。其の主張論旨は天變地夭等の絶へざるは、人皆な正法を棄て邪法に皈するより、善神國を去り聖人處を辭して還らず、故に惡鬼來り災禍起るなりとて、經典を引て之を證明し、其の邪法の宣傳者は法然上人なり、此の邪法を禁せずば、國中安穩ならずと云ふが、其の骨子なり。然るに其の文章頗る長く之を擧ぐる能はざるを以て、茲にその要處を取意的に摘錄すべし。

先起レ問曰、自二近年一至二近日一、天變地夭飢饉疫癘、遍滿二天下一廣迸二地上一、是依二何禍一是依二何誤一、

答曰、披二經文一、世皆背レ正人悉歸レ惡故、善神捨レ國而相去、聖人辭レ處而不レ還、是以魔來鬼來、災起難起。引二金光明最勝王經四天王護國品之文一、證二謗法之國有二天變地夭一。

引二大集月藏經法滅盡品之文一、證二佛法隱沒、天災地夭、善神去レ國。

引二仁王般若波羅蜜經護國品之文一、證二國亂時先鬼神亂七難必起一。

引二藥師瑠璃光如來本願功德經之文一、證二國亂時七難起一。

又曰、法師（法然を斥す）諂曲迷二惑人倫一、王臣（北條を斥す）不レ覺而無レ辨二邪正一。

引二法華經勸持品之文一證レ之。

又問以二誰人一謂二惡比丘一。

答曰、有二法然者一、作二選擇集一、破二一代之聖經一、遍迷二十方之衆生一。擧二選擇集之文一破レ之曰、引二曇鸞道綽善導ノ謬釋一、建二聖道淨土、難行易行之旨一、以二法華眞言一代之大乘一、皆攝二聖道難行雜行等一、以二捨閉閣抛之四字一、迷二一切一、以二三國之聖僧十方之佛弟一號二群賊一、近背二所依三部經ノ唯除五逆誹謗正法ノ誓文一、遠迷下一代五時之肝心、法華經第二ノ若人不レ信毀二謗此經一、乃至其人命終入二阿鼻國一誡文上者也。遂以二承久ノ亂一爲二謗法之所一レ致。

問曰、若消レ災止レ難有レ術欲レ聞。

答曰、禁二謗法之人一、重二正道之侶一、則國中安穩天下泰平、乃主下張引二法華經涅槃經等ノ文證一、以二法然一爲二謗法者一、其行者亦置二之于同罪一、若早ク不レ禁二是等謗法一、必自界叛逆他國侵逼難起上。

奥書　從二正嘉一始レ之文應元年勘畢

要領斯くの如し、安國論の價値之にて概見せらるゝにあらずや。且つ其文章體裁建白の式を欠く、無禮不敬、當時余若し宿屋入道の地位に居らば、斷然之を却けて受けざりしならん。

三、佛教の宇宙觀

安國論は其の當時に於る天變地夭（其實變にもあらず夭にもあらず皆是れ自然の現象である）が問題と爲て居る、故に安國論を評せんには、先づ其の所謂天變地夭より研究せざるべからず。

俱舍論の世間品には、佛教の宇宙觀を詳說す。其の文長ければ、今玆に擧ぐるに便ならず、要を摘んで之を言はんに、此の世界は諸ろ有情の增上力を以て、風輪水輪金輪等を成して、大地は其の上に在り、大地の中心は即ち須彌山にして、其の周圍に八大海がある、四大洲がある、東なるを勝身洲、西なるを牛貨洲、北なるを俱盧洲、南なるを閻浮洲と爲す。日月は須彌の中腹に懸りて須彌を廻りて晝夜を爲す。

天は儒道の所謂天とは異りて、人間以上の勝妙の果報を受くる所にして、其の一部は須彌山の中にあり、其の一部は遠く蒼空に在りて、總して之を天趣と名け六趣の一と爲す。

大地は無限に平坦にして、其の下に八大地獄がある。

斯樣の宇宙觀であるが故に、佛教に所謂東西南北は皆な無限の平坦想である。法華經壽量品の東方五百千萬億の佛國も、阿彌陀經の西方十萬億土の極樂世界も、一齊に平坦地より出たる說相である。

日月蝕は修羅と帝釋との鬪爭に際し、修羅が手を以て日月の光りを遮ぎりたるものと爲し。彗星其の他の所謂天變等亦有情の業因と爲す。今其文の一二を出して見よう。

正法念經云、修羅與帝釋鬪時、日月之光射修羅之眼故、修羅以手障日月、世人不知、謂爲日蝕』

涅槃經云、羅喉阿修羅王以手遮月、世間之人咸謂月蝕、修羅實不能蝕、以修羅障其明故』

又云、見月不現言月沒、實無沒也、以須彌山障故不現』

華嚴經云、一國人咸惡緣則、彼當土衆生覩諸一切不祥、或見星玦彗孛、但此國見彼國衆生、本所不見』（此の但書が面白いてないか）

女珠儀經云、天人阿修羅等行不善相鬪戰時、此人間現諸惡相、所謂非時地動忽作、風雹閃電異常天火黑煙處々皆起』

首楞嚴經云、或見二日、或見兩月、其中乃至量適、珮玦、彗星、飛流、負耳、虹蜺、種々惡相』

當時進步したる學者間には、疾く已に地球の自轉公運等の說もありたるが如くなるも、釋尊は是

をも否定せられて居る、其の文が頗る面白い。

佛說立世阿毘曇云、(立世阿毘曇古來疑あるも吾輩は未だ之を詳かにせず)有二諸外道一作(シ)如レ是說一、是ノ大地恒ニ去テ不ト レ息、是ノ言ハ、應レ答、此事不レ然、若實ニ爾者如ニ向レ上擲一應(シト)レ不レ至レ地。又諸外道作(シ)如レ是說一、日月星辰ハ恒住メ不レ移、大地自轉ス、疑フ是ノ天廻ルカト、是ノ言ハ、應レ答、此事不レ然、若如レ是者、射テ不レ至レ堋(アタナニ)。又諸外道作(シ)如レ是說一、大地ハ恒ニ浮ンテ隨レ風來去スト、是ノ言ハ、應ニ如レ是答一此事不然、若實ニ爾者地恒ニ併動セント、若不レ爾者地作ニ何相一住メ不ルト レ動』

何と外道外道と輕蔑せる者の學說の進歩しありしに驚くにあらずや、又同時に釋尊の否定說の幼稚なるにも驚かざるを得ぬでは無いか。佛教を讀む者の大に注意すべき所であると思ふ。

我國の學者に佛教は後世に至り其の宇宙觀より破るゝを憂慮して、之が辯護を試みたる人もある。前には不染居士の護法資治論となりて、曰く我恐ル千載ノ後有下人不上レ信ニ釋氏之說一大ニ致ニ毀謗一必自ニ天地之度數一而始ンコトヲと、圓相圖を製して之を辯護し。後には普門律師の佛國曆象篇となりて奇怪なる說を立て、近くは雲照律師も小學教科書に地動說あるを不可と爲し、當局へ獻言したりと聞く。佐田介石氏は其の後援者であつた。今是等の人々の說を見るときは、實に噴飯の至りである。

今日如何なる佛教家にても、以上畧述せし佛說を生かして讀む人はあらざるべし。

某某の佛教家は曰く、佛典中の天地觀は釋尊以前よりの印度傳說にて、釋尊は時世に順應して其儘之を述べられたである、元來之等のことは佛教の本領では無いと。夫れ或は然らん、此等の說に依るも、佛教中の天地觀は已に佛說中の除外部分であることが明瞭するでは無いか。

古昔に於る天文等は獨り佛說のみならず、儒書中にも同樣である。今其の一二を出せば

大戴禮曰、孔子曰、古之治ニ天下一者必聖人、聖人有レ位、則日月不レ食、星辰不レ隕』

楊慈湖曰、堯舜禹之時無ニ日食一、至レ夏太康失レ國始日食ア』

淮南子曰、堯ノ時十日幷出、堯命レ羿仰射セシム中ニ其九烏一皆死』

綱目曰、食(ハ)莫レ不レ有レ應、豈不レ畏哉』

五雜俎曰、虎交而月暈シ、麟鬬而日食ス』

春秋曰、莊公六年四月夜恒星不レ見、星隕如レ雨○文公十四年七月有ニ星孛入ニ于北斗一』

此の如き蒙昧の傳說は、科學(不完全なりと雖ども)の開けたる今日にては、皆抹殺せらるは當然である。

扨安國論は、釋尊以前より唱へられたる天竺の所謂蒙昧なる傳說の天變地夭を以て、立脚地と爲し、之を佛教中の又一種傳說的の文句に照して、立案したるものである。今より六百餘年前に於て

融通のつかざる程の眞正直なる日蓮上人が佛語不虛と云ふを極端に信じて、經中の一字隻句悉く此の世に實現するものと考へて、彼の如き論說を作りたるは、敢て無理とは思はざれども、今日より之を評するときは、其の根本たる佛教宇宙觀の除外せられたる以上は、安國論の問題たりし所謂天變地夭亦同樣自然現象と認めらるゝを以て、安國論は大體に於て其の根本より破れたるものと爲すべきではあるまいか。

因に記せん、日蓮上人は以上掲ぐる如き蒙昧の傳說を眞正直に受けて掛る結果、遂に其の言ふ所愚極まるに至ること甚だ多し。今其の一二を擧げんに。

法華鈔（八二九）に玄奘三藏の西域記より引きて云く、此の大地は厚さ十六萬八千由旬也、されば四大海の水をも九山の土石をも頂戴し、一切衆生をも住持すれども落ることなし、傾くこゝなし。然るに調達が五尺の身一艸一瓦一石等よりも輕かりしに、所作の三逆罪重かりしかば、王舍城の大地破裂して生身に無間地獄に入る。此穴今に有レ之入レ水不レ滿入レ石ウメラズ、阿鼻大城にとゝふれる穴なるが故也（孤山試に上人に問はん地湧千界の諸菩薩の出たる大穴は今尙ほあるや如何）

報恩鈔（一六七）に云、日月は虛空に住し給へとも、我等が大地に處するが如くして墮落し給はざることは、上品の不妄語戒を力めてぞかし。法華經に勝れたる御經ありと仰らるゝ大妄語あるならば、恐くは未だ壞劫に至らざるに、大地の上にどゝふと落ち候はんか、無間大城の最下の堅鐵にあらずば止まりがたからん（孤山云或は上人の譬喩方便かは知らざれども凡流の惑ひ思はざるべけんや）

法華取要鈔（二三八）に云、佐渡の土民口々に云く、正月二十三日申時西方に二日出現す、或云三日出現す、二月五日東方に明星二つ幷び出づ、其の中間三寸許りと、此の難は日本國先代に未レ有レ之歟』

不レ依レ語可レ依レ經とは上人屢々自ら誡むるに係らず、今其のお目出度さ加減笑はざらんと欲するも得ず、是等の類遺文錄中枚擧に遑あらず。上人は正直過度にて常に是等のこと迄も信じて掛る、其の頭腦より迸りて安國論と爲つた、安國論の價値も凡そ知らるゝてはあるまいか。尙ほ上人の輕信は後に至り更に掲ぐる所あるべし。

四、天文諸現象と兵亂とは謗法の爲にあらず

日蓮上人は謗法の爲めに天變地夭も現し兵亂も起る如く論ずれども、上人以後の實況を考察する

に、天文諸現象も兵亂も共に謗法の故にあらざるは明かである。上人入寂後年を逐ふて法華宗の寺院も段々盛況を顯現し來りたるに、天災地變は上人在世當時よりも甚しかりし。試に二千五百年史を把りて之を檢するに、云く

『是より先寶暦十年二月江戸大半燒失し造營未だ成らざるに、安永元年二月目黒の行人坂より火を發し、本郷淺草下谷谷中を燒き江戸大半灰燼となり、幅延一里長さ四五里の荒原を生じ、死者四百餘人に至る。已にして八月に入り大風大雨ありて全國收穫の大半を失す。安永二年の春より疫癘大に行はれ死者相次ぎ、二月より五月の間江戸市中のみにて死者十九萬人に達し、遠州日坂附近は人煙殆ど盡くるに至る。已にして天明三年七月淺間山噴火して村落荒原となり、人畜殆ど滅盡し死屍樹木流れて江戸海に浮び、災害の及ぶ所四十里、上野信濃武藏の三州人心恟々として安せず、所在相起て領主に抗す。連年風水疫の結果は天明四年に至つて古今未だ曾てあらざる凶年を生じ、米價騰貴し國民食を得ず、犬猫鼠を食して盡るや草根木皮を食ふに至り餓殍道に横はる、中につき四國關東奥羽最も甚しく、飢民百千隊を爲し食を尋ね食を得るや同胞相爭ふて食ひ、食を得ざるや父子夫婦枕を幷べて倒れ、呻吟の聲數里に徹し、樹下草間屍體累々として横はる』

又德富蘇峯氏の近世日本國民史を見るに、慶長元年閏七月十二日の大地震は地震國を以て名ある日本に於ても稀有の一で、特に畿内地方に於て最も劇しくあつた、其の顚末は當時の記錄に歷々存して居ると云ひ。伏見城の大厦高樓悉く顚倒し侍妾七百皆壓死し、京都の皇居大佛殿等より神社佛閣の崩壞、市街村落の損害、三四千戸の地忽ち陷りて大澤となるを叙し。尙ほ此の地震は大小連續して逐に同年十二月に及びて慘狀を窮極したるを說くこと最も詳かなり。文長ければ爰に寫すに便ならず。尙ほ此の年一大彗星の出現あり、日蝕あり月蝕あり大風あり大雨あり、特に不思議なるは灰とか毛とか奇怪なる物天より降りたと記せらる。

恐くは是れ等は安國論の『自二近年一至二近日一天變地夭飢饉疫癘滿二天下一』より迫か以上の慘狀たりしならん。而して兵亂亦尙ほ甚だし、元弘建武に於る尊氏兄弟の不臣は北條に勝る萬々、織田豐臣より德川に至る迄内亂相次ぎ、戊辰の役西南の役より遂には日淸日露日獨の大戰に及ぶ。誰か之を謗法の故と考ふる者ゾ。

上人は元兵の襲來を謗法の爲と爲す、殊に佛が隣國の聖人に勅して謗法國懲治の爲めに出兵せしめたと主張す。空言囈語一笑に付して可なり。

天災地變の如きは、欽明天皇以前に在つても年代記上屢々見ゆ、其の佛敎と相關せざるは明かでな

いか。歐米諸國は初より佛敎に觸れず、而も天災地變常に絶えず、其の兵亂の如き古往今來絶ゆる時なし、殊に這般の歐洲大戰の如き全く佛敎とは沒交渉である、何ぞ獨り我正嘉以來に於ける天災地變兵亂等に限り、法華經不流通の故であると爲すを得んや。唯是れ上人當時に在つては識見狹少、理想未だ孤島の外に出づる能はず、井蛙の見を以て大集經金光明經等の古傳說を極端に信じたる誤に坐するのみ。之を要するに、法華經の對照を自家の爲めに縮小して、無限大の閻浮提を日本孤島の如くに考へ成したるが故に、遂に安國論の如き窮屈千萬なる理屈となりたるものなり。壽量品に於る如き偉大も偉大、五百千萬億倍の恒河沙數を尙ほ五百千萬億倍加したる無量無邊偉大なる本佛釋尊か、何ぞ十方法界中一芥子粒の幾千萬分一にも價せざる地球の而かも其の一小部たる日本孤島內に、彼が如き一大法華經を特に廣宣流布すべく屬累せらるべく思はるべけんや。吾人の微々量なる思想を以てしても今や地球世界上自由自在に所居と爲すの時代に至り、曾て佛敎其のものが僅か印度の一角に局限的に廣まりたるさへ疑團の一つではあるまいか。少くも斯くの如き見解を以て是を觀るときは、上人の島國根性的主張は餘り有り難くは思はれず。

又上人は文永元年七月彗星東方に出で、餘光一國に及び、國初より已來無き所の凶瑞なりと幾度も繰返し、謗法の爲めである謗法の故であると、頻りに呼號したれども、是れが則ち島國根性である。

何となれば、此の彗星の如き獨り我國に見ねしのみらず、高麗史元史共に之を載す。蓋し是れ東洋諸國皆共に見る所、何ぞ是を取て以て我國の爲めの凶瑞と爲すを得んや。上人知らずや、扶桑畧記卷第二十五に亦曰く『天慶四年三月、相ニ當リ西方ニ、有レ星其光如ニ白虹一、本細ク末漸廣シ、程十里許リ、經ニ二箇月一、其號曰ニ穗垂星一、其秋年登天下頗豐ナリ』と此の彗星亦東洋諸國に於て等しく見えしならん。上人尙以て彗星を謗法の祟りと爲さんとするか呵々。

五、上人時代の學者の迂愚

余一夕德富蘇峰氏と晩餐を共にす。氏の談に云く、從來歷史家の人を觀るや、一度惡人の帳簿に入りたるものは、どこまでも之を惡人として多少の善行ありたる時にも之を認めず、又一度善人として記帳せられたる者は、偶々不善行ありたりとも强て之を善化せんとするの弊あり、全の同意し難き所である。余の豐公を記するは豪傑として觀る時あり、又否らずとして觀る場合あり。由來人間は常に變遷して止まず、故に其の變遷其儘を直寫してこそ、其の人を活躍せしむる所以である云々。今日徒の日蓮上人を觀る、或は氏の同意し能はざるものあるにはあらざるか、吾輩は之を前提として、又少しく上人の一面に向て評せんと欲す。

日蓮上人の思想の一面が如何に迂愚にてありしかは、獨り宇宙觀のみならず、日本の人口を多分舊記に據りたるならんも、四十五億八萬九千六百五十九人、或云四十九億九萬四千八百二十八人（曾谷書一六五〇）と爲して、然も之を上人當時の人口と考へ（此の人口に就ては次に詳論す）又我國の位置を天竺の東二十餘萬里（妙法尼書五八六）と心得（六丁一里としても三萬三千三百餘里玄奘三藏其の他の往來に稽へても日竺間の距離位は推測し得らるべきに）或は阿育王は南閻浮提を大體知行すと承り候（南條書六二二）杯と云ひ、或は彼の國の百千萬億の兵、日本國を引廻して寄せてあるならば如何になるべきぞ（一谷書五〇三）と云ひたる如き以て知るべきである。夫も其の箸龍樹菩薩も印度に生れながらヒマラヤ山の大體すら知らず、其の智度論に於て古傳說を其儘に、雪山中に阿那婆達多池ありて四河を發し、西海北海南海に注ぎ、其の東海に流るゝもの即ち恒河にて、其の底は金沙より成ると思ふて居た（日徒は前提の筆法を以て沙金ある故と辨ずるならん）彼の帝釋の九十九億那由他の后は舍脂夫人を妬み。悉多太子は閻浮提を知行すること八萬四千二百一十の大玉にて、御內の召使人十萬億杯の類怪むに足らざるなり。

法蓮鈔（八四三）に云ふ所も上人の思想程度を窺ふに足る、其の文に曰く

『問て云く、正嘉の大地震文永の大彗星を謗法の故と知らせ給ひける故は如何、答て曰、此の二の天災地天は外典三千餘卷にも載せられず、三墳及五典史記等に記する所の大長星大地震は或は一尺二尺一丈二丈五丈六丈也未だ一天とは見えず（何ぞ夫れ迂愚なるや）、地震亦如是內典を以て之を勘ふるに佛滅以後かゝる大瑞出現せず（富士の噴火土佐の南半入海等は如何、又後の事ではあるが安政年度四國に見えた彗星は恐らく更に大ならん）月氏は弗沙蜜多羅王の五天の佛法を滅し十六大國の寺塔を燒きし時もかゝる瑞なし（是を以ても地震や彗星等が謗法と無關係なるは知らるゝで無いか）漢土には會昌の天子寺院四千六百餘を廢し僧尼二十六萬五百人を還俗せしめし時も出現せず（何ぞ迂なる）我朝には守屋佛法に敵し淸盛七大寺を燒き山僧園城寺を燒きしときも出現せざりし大彗星大地震なり。當に知るべし是よりも大事なること一閻浮提に可出現なりと勘ヘ之造二安國論一』云々

と安國論の價値亦以て知るべし。

更に笑ふべきは地震彗星を惡兆と爲すかと思へば、今度は之を吉瑞に引きて、顯佛未來記（四七六）に曰く

『佛の御誕生の時五色の光氣四方に遍く、佛の御入滅の時十二白虹南北に亘り日輪無光、然るに去る正嘉より今年に至る迄或は地震或は大天變宛も佛陀生滅の時の如し、當に知る如し佛聖人

生歟滅歟』云々

五色の光氣十二白虹の如きは眞に瑞相たらん、地震大風飢饉疫癘彗星兵亂等豈に瑞相ならんや。然るに上人は是等の天變地夭を光氣白虹と同一視して、自ら上行菩薩の再生と自信す。本氣の沙汰にあらざる也。

磯野氏曰く、法華の六瑞中には地動瑞と稱して、地震亦是れ瑞なるを說けりと。吾輩は言はんとす、是れ佛敎に醉へる說なり、若し夫れ醒て經を讀めば、所謂地動と世間の地震と同一ならざるは明かである。謂ふ迄も無く經に云ふ地動は佛の神力の所現にて、會座の衆をして地動を感ぜしむるに過ぎず、固より眞に動搖するにあらず。故に人畜物件一も害なし、世間の地震は則ち否らず、人畜物類悉く害せらる、彼は瑞なり是は災なり。今夫れ自然的變災を以て神力に依る法瑞と同視す、醉て經を讀むにあらずして何ぞ。試に氏に問はん、法華經の湧出品に於て菩薩の地より湧出すると、氣節の自然に蟬の地より湧出するとは、同一なる哉如何。

又唱法華題目鈔（二五三）には『望朔に非ずして日月蝕し』の經說を引きて謗法の兆と爲す。凡そ斯の如き迷信思想に居て、只一律に諸經の說相を極端に信憑し、雲を摑むが如き閻浮提を自家の都合に縮少して、我日本一ヶ國のことゝ爲し、强て時勢に附會して作爲したる安國論は、當時の低級思想に在りては、一顧せられたらんも二十世紀の文運に會しては一笑に付すべき也。

尙ほ一事上人に問たき事あり、法門可申事（七三九）には妙と申すは絕と云ふ事、絕と申す事は此の經起れば己前の經とを斷止と申す事なるべし』と云ひ法蓮鈔（八三四）には世尊と申す尊の一字をば高と申す、高の一字は又孝と訓せり、一切孝養の人の中に第一の孝養の人なれば世尊とは奉レ號』とあり。上人の發明說にもあらざるかは知らざれども、是等の漢字國訓の理屈が、梵語の曼乳路迦耶他、或は婆迦婆等に通用するであろうか如何。

六、上人時代の學者の迂愚（其二、人口に就て）

日蓮上人の日本人口は遺文錄中に多少の相違を以て十數個處に見ゆるが、曾谷書（一六五〇）には四十五億八萬九千六百五十九人、或云四十九億九萬四千八百二十八人と二樣に揭げられてあつて、其の差が實に四億〇五千百六十九人てある。

毅堂氏（姓名を出さゞるを以て斯く云）は日宗新報の大正十年十月號前篇に、上人が右の如く五億と九億と兩樣に擧げられたるを知らずして、他の處に見ゆる五億の字に就て、漫然臆斷して是れ上人の草書の九の字を五の字に誤讀したるものてあるとして居る、興味深き笑柄である。又同氏は右の

人口は十萬爲億の算法であることを辨じ、當時の文書を讀むものゝ疑はざりしところと云はれて居る。故に吾輩は其書目を問合せたるに、返書は得たるも書目は言はず、其の何の故たるを解するに苦しむ、氏の爲に惜まざるを得ぬ。

日眼女書　九〇三）には男女を分ちて男十九億九萬四千八百二十八人、女は二十九億九萬四千八百三十人（計四十九億八萬九千六百五十八人）とありて、女の男より多きこと實に十億と二人である、又男女共に九億九萬四千八百の同數字である。假令舊記に據りたるにもせよ、上人が一瞥して杜撰の甚しき此の男女別を何等の不審も起さざりしは、其のれ目出度さ加減が分かるではあるまいか。毅堂氏も磯野氏も此の男女別の數字には何の不審も無きものゝ樣である、吾輩は夫が不審である。又磯野氏は鎌倉時代には十萬爲億の算法であつたと主張せらるゝも、我輩は新材料を得たるを以て前掲人口の十萬爲億は之を認むるも、鎌倉時代は十萬爲億の算法でありたりとは思はぬ。只此の人口が多分舊記でありて特別に十萬爲億の算法であつて、其の他は凡て萬々爲億であつたことは、上人の遺文中　二十萬里と書き、千二百萬或は二十六萬等と書する類枚擧に遑あらずして、唯の一個處だも十萬爲億の算法を取りたる跡無きを以てゞある。

磯野氏は右の如く十萬爲億の說にて四十九億八萬は即ち四百九十八萬であると爲し、而して曰く

『此の數を以て且く鎌倉時代に於る人口の實數と假定せんか、之を以て現代に於る日本人口の七千萬に比し十六分一强に過ぎず、六百年前に於る本邦人口は現在に於る人口の十六分の一なりとせばその數や決して過大に失するものと爲すべからざるにあらずや』と、即ち氏は此の數を以て上人當時の人口の實數と假定し、然かもその數や決して過大に失するものと爲すべからずと言へり。是れ其の研究精緻を極むる氏の說とは受取り難し、何となれば四百九十萬は現今の東京人口の二倍强に過ぎず、鎌倉時代の日本としては過大に失するどころか大に過少に失す。試に氏に問はん、上人時代の前後に於て四五十萬人乃至百何十萬と云ふ大兵を動かしたるに、能く四百九十八万許の人口を以て之を供給し得べく思はるゝ乎、氏の此の推定は吾輩の新材料を以て破れたり。

或云彼の人口は行基の人別調に據ると、吾輩の今日までの研究に依れば、四十五億の方は行基の時に於る舊記にて、四十九億の方は弘安年間に傳へられたるものと思はるゝ所なきにあらず。

奈良朝時代より鎌倉時代に至る迄凡て萬々爲億の算法を取りたることは、諸書中に何百萬、何千萬等の字あるを以て明瞭なるに、獨り此の人口に限り十萬爲億の算法に依りたるは、抑々如何、或は佛者の事を好みて智度論の所謂舍衛城中九億の家あり云々の筆法に倣ひたるもの乎、是れ多少の疑ひ無き能はず。或は億の字を俱胝の義に取りたる乎、俱胝は玄應音義に此言二千萬一或言億而甚不

同と云ひ、深密記には俱胝ハ相傳ノ譯有ニ三種一一者十萬、二者百万、三者千萬唐ノ三藏譯ニ定千萬」とありて、十萬爲億に一定せず。

尙ほ他の億の字に就て言はんに、南條書(六二二)に云ふ『彼の國の百千萬億の兵日本國を引廻して寄せてあるならば』の億の字は、或は單に大數を擧たるかは知らざれども、若し之をも十萬爲億と見るときは、上人の折角の警告も無意義となるべし、何となれば上人は承久の三十九萬人も又其の以前に於る富士川の源平軍三四十萬騎も皆能く之を諳しられたれば、所謂大蒙古の襲來を警告するに、十萬許の兵額を呼ばるべき筈なければなり。(撰時鈔一四四に云大蒙古國數萬艘の兵船を浮べて云々)旁以て上人の謂ふ所の億の字は、只彼の人口を除くの外は十萬にあらざること、殆んと疑を容るゝ餘地無きものである。

由來億の字は古來より億兆とか千萬億とか云へる漠然たる想像大數の場合に使用せられて、之を實數に使用せるは甚だ稀なり(或は皆無かも知らず)。日淸の役に軍費一億圓を可決す、當時福澤翁の曰く余は億の字を知るも之を實際に使用せしは此度が始めであると、鎌倉時代にあつては尙更の事と思はる。因に云ふ、此の篇起草中伊藤祐晃氏の書信に依りて梵辭ノ註ニ十萬爲ニ億古ノ數也、秦ノ時改レ制始以ニ萬萬一爲レ而億億爲レ兆謂ニ之ヲ大乘ノ數一而已』とあることを知れり、亦以て參考と爲すべき也。

吾輩の得たる新材料とは、明治四十一年に博文館より出版せる世界年鑑である、其の掲ぐる所に依れば

日本紀元	御代	年號	人口
千二百七十年	推古天皇	十八年	四、九八八、八四二
千三百九十六年	聖武天皇	天平八年	八、六三一、七七〇
二千三百八十三年	中御門天皇	享保八年	二六、〇六五、四二二

である、而して其の注記に『古來人口古書に徵して參考に供すべきものを掲ぐ』とあるのみにて其の出典を言はざれども、先以て憑據と爲すべきものと思ふ。此の表に依るときは、前掲の四十九億八萬九千は推古朝の人口に近きものと思はる。行基は聖武帝の時の人なり、然らば則ち此の表に於る八百六十三萬餘の數を知らざらん、四十五億も四十九億も行基の調べにあらざるに似たり。

鎌倉時代の人口は此の表に見えざるも、之を其の前後に照して考ふるときは、二千萬人內外ならざるべからず。日蓮上人が此の年鑑記する所の舊記を見出し得ざりしと爲すも、彼の四十五若くは九億の調べの年代古きことは之を知らざるにあらざるべし、而して人口の年代を追ひ增殖し來る位

いは分るべき筈なるに、更に之等の思量も爲すことなく、舊記其儘を以て然かも之を上人當時の日本人口と爲して屢々書して門下知友に示し、尙ほ且つ一見杜撰極まる彼の男女別を取りて何の不審も起さゞりしに至りては之を何とか評せん、吾輩の以て迂愚と爲す所以である。

七、上人時代の學者の迂愚（其三、人口に就ての補足）

前節其二を草せし後に於て復た新資料を發見す

類聚名物考に曰く『往古の時推古天皇の御宇上宮太子日本の人民を數へ給ふ時男女幼子共に四百九十六萬九千八百九十人、其の後四十五代聖武帝の御宇行基菩薩に仰せて人民を數へ給ふに男女幼子共に八百六十三萬千七十四人、或は云く四十五億八千九百五十一人（後）宇多天皇弘安年間の記に人民の數四十九億九萬四千八百二十八人、內男十九億九萬四千八百二十八人、女二十九億九萬四千八百三十人』と（男女合計の合はざるは傳寫の誤りならん乎）

類聚名物考の編者は山岡浚明と云ふ（安永九年歿）成稿の年月は明かならず。今此書の記する所に依りて考ふるに、日蓮上人の時之等の舊記ありたるものと思はる、其の弘安年間の記と云へる四十九億及び男女別は當時の文書に傳はりたるものか、將た編者が日蓮上人の遺文に依りて斯く書きたるかは之を知るに由なし。前稿に掲げし世界年鑑の數字とは多少の相違あるも、蓋しこれ等の舊記の傳寫に誤りを來したるものと思はる。

日蓮上人の人口の出所が是等の舊記であつたとすれば、當時萬々爲億の算法であつたことも明瞭である。それを故らに四十五億と書きたるは奇を好む輩ありて、特に十萬爲億に換算したるもの乎。上人は彼の錢、酒、味噌、蕪菜等迄も好んで異名を用ゆる雅癖があるから普通の數字を故らに億の字に換へたるを喜びて、彼の如く四十五億又は四十九億と書きたるにはあらざる乎。それは兎も角類聚名物考の記事は國史には見ゑざるも、上人の人口の研究には有力なる參考であると思ふ。

此の新傍證に依りて、上人の人口問題は殆んど解決するを得たるも、吾輩の上人を迂愚と評するは依然として動かぬ、其次第は前稿の通りである。（大正十年十一月七日補稿）

八、日蓮上人の見たる選擇集

日蓮上人は法然上人の選擇集を見て曇鸞、道綽、善導の謬釋を引き云々として、此の選擇集が謗法となりて世を惑はし國家を毒したる如く論じて居らるゝが、吾輩は淨土宗徒にもあらざるを以て、

果して謬釋か否は專門家の研究に讓り、强て之に觸るゝ要もなし。唯其の六百餘年の跡即ち日蓮上人入寂の後を見るに、格別謗法と見ゆる所も無く、又國家に害毒を流したる樣にも思はれず、寧ろ念佛が國家に貢献した功績の大なるものありたりと認むるのである。

又日蓮上人は法然上人が法華經大日經等を聖道難行雜行等に攝めたとて、嚴敷く責めらるれども、念佛を以て絕對の信仰と立つる以上は、其の結果凡ての大小乘諸經を捨るは己むを得ざる事ではあるまいか、丁度日蓮上人が唱題を以て絕對の信仰と爲し爾前の諸經を捨て（全く捨てたでも無し安國論には之を引用す）又『四十餘年の諸經幷に涅槃經を打捨させ給ひて法華經を師匠と御憑候へ』（唱法華題目鈔二五二）と言はれしと同一のことではあるまいか。但し斯く言へば日徒は必ず言はん『上人が爾前經を捨つるは、無量義經に四十餘年未顯眞實の打消がある故である、法然上人が獨斷に法華經大日經を併せ捨つると同一視すべからず』と、其の未顯眞實を爾前經の打消文と見るは、日蓮上人一家の流儀で一般普通の讀方では無い、其の次第は後に至り之を說かん。

元來佛敎の共通的目的は人を善道に導かんとするである。滔々たる凡流到底道理の分る筈がない禪は禪機ある者にあらざれば入るも益なく、眞言も律も同じく通俗的のものでなく、獨り念佛は以情趣入で頗る凡愚の情想に適當したる善巧方便である、七百年來凡愚者流の亂想を取鎭め、比較的善化し來りたるは何と云ふても事實上の大成功であつた。日蓮上人は念佛行者を擧げて墮地獄と叱責せらるゝも、我國初めより佛敎無くは如何、然るときは歐米各國人と同一に障らぬ神に崇無し的に、謗法論も墮地獄論も一切無き筈である、偶々佛敎が流れ入たが爲に、後に生れた上人が念佛は不可、唱題こそ大切であると八釜しく言出したである。試に日徒に問はん、地球上十六億餘萬人中僅少の佛徒を除くの外の大部分は、皆是れ墮地獄か如何、此の大部分の人類は曾て佛敎に觸れざるの故を以て地獄の苦を免かれ、日本人（他宗敎者は除く）は佛敎に觸れたるが爲めに、念佛を唱へて地獄に墮つべき乎。假令無量義經の未顯眞實を上人流儀に爾前經の打消と讀むとした所が、念佛は固と釋尊の力の入たる說法である（觀經は法華會と同時の說もある）其の佛勅に從ふて信念を凝す者を何の用捨もなく擧げて之を謗法と爲して地獄の刑に處する如き、無慈悲極まる釋尊ではあるまいと思ふ。況や未顯眞實を爾前經の打消と解釋するは、唯獨り日宗に限ることにて、一般的讀方にあらざるに於てをや。吾輩の如き念佛門にも依らず、法華宗にも這入らざる無羈獨立の佛敎道樂者は、全く歐米人と等しければ幸に日蓮上人の叱責をも蒙らず、隨て謗法墮獄ともならざるは幸福の至りである。

日蓮主義者が折伏と稱し旗を飜して常に攻擊動作を取りつゝある臨戰地境は狹隘にして日本孤島

を出てず、他の環境たる世界の人類は皆な局外に中立す、如何にも蝸牛角上の爭ひで笑止千萬である。釋尊は『今此三界（皆是我有其中）衆生（悉是我子）』と言はれたるに、其の子中の一部分たる日本人が念佛を唱ふるを惡みて地獄の極刑に處し、他の大部分の人類は曾て佛敎に觸れざるを以てお構ひ無いであらうか。是等の觀察よりしても、日蓮主義者が廣大無量なる大法華經を武器として、日本の念佛者を攻むるは牛刀割雞よりも甚しきではあるまいか。恐らく佛意に契合せることゝは思はれず。之を要するに、宏大なる法華經を縮小して、叢爾たる日本孤島に受込みたる誤りに坐する無きを得んや。

人あり墮地獄とは何れの處に行くかと問はゞ、日徒は前に掲げし調達墮獄の例もあれば、定めて答て云はん、地獄は此の地下五百由旬を過ぎて閻魔王宮あり、其下一千五百由旬の間に一百三十六の地獄あり、其中に一百二十八の地獄には輕罪の者を置く云々と（法華鈔八二九、十王讃歎鈔一六七四參照）。又問ふ成佛には幾許の年限を要するかと、日徒答へて云はん、二乘成佛の一例を以てすれば、智惠第一の舍利弗尊者が法華經に於て授記せられしとき『汝於未來世、過無量無邊不可思議劫、供養若干千萬億佛、奉持正法、具足菩薩所行之道、當得作佛、號曰華光如來』と言はれて、即ち生身得忍であると。素人が之を聞けば成佛不可能の宣告である。何となれば、無量無邊不可思議劫は際限無き時間の暗示なればなり。要するに日蓮上人が墮獄墮獄と恐嚇する其の地獄は彼の如くで、成佛成佛と勸むる成佛は是の如くである。念佛と唱題の勝劣を研究せんには、以上の如き經相より講究するの要ありと思はる。若夫れ日徒が否々成佛とは即身成佛であると云はゞ、然るときは禪宗の見性成佛と擇ぶ所無く、凡愚を直ちに十哲中智慧第一の舍利弗尊者や、頭陀行第一の摩訶迦葉尊者等より以上に上らしめんとするものにて、亦以て天魔の所爲と云はざるを得ぬのである。

九、經は見る人に依りて各其の解を異にす

經は見る人毎に各其の解を異にす、日蓮上人は開目鈔（四七）に『四十餘年の經々をば東春の大日輪寒氷を消滅するが如く、無量の艸露を大風の零落するが如く一言一時に未顯眞實と打消』云々と力說して、無量義經の四十餘年未顯眞實の文を、全く爾前諸經の打消文であると見られて居る若し夫れ此の文を爾前經の打消と解して掛れば、總ての見解は其れより割り出さるゝので、其の結果が念佛無間禪天魔等と成るも無理からぬことである。併し他宗の學者は多く其の解釋を異にして

居る、吾輩も夫れと同じく此の未顯眞實の文は、其の前後の文相より之を推して、爾前經の打消とは思はぬ。先づ無量義經の文を出せば。

『諸衆生知二性欲不一レ同、性欲不レ同故、種々說レ法、以二方便力一、四十餘年未レ顯二眞實一』

是である、誠に明瞭に爾前經々は應機的方便說であると宣言せられてあるては無いか、法華經の正直二捨二方便一も亦同一義である。之を一言一時に諸經を打消されたと讀むは如何であらうか、以下諸經を引き少しく研究して見よう。

法華經囑累品曰『若有二衆生一不二信受一者、當下於二如來一餘上深法中一示數利喜上』

餘の深法とは無論爾前經のことであれば爾前經が打消されて居らぬことが分る。現に上人も唱法華題目鈔（二九〇）に『若し機堪えずば、餘の深法の四十餘年の經を說き、機をこしらへて法華經を說くべしと見ゑたり』

と言はれて居るでないか。

藥王品曰『若有二女人一、聞二是經典一如レ說修行セバ於レ此命終レ、即往二安樂世界阿彌陀佛一大菩薩衆圍繞住處一、生二蓮華一中一寶座之上一』

此の文は淨經其儘て亦爾前經が打消されて居らぬこと明かである。但し日蓮上人は

法華初心成佛鈔（三三九）に『觀經の阿彌陀は、法藏比丘の阿彌陀四十八願の主じ十劫成道の佛也。法華經にも迹門の阿彌陀は、大通智勝の十六王子の中の第九の阿彌陀にて、法華經大願の主の佛也。本門の阿彌陀は、釋迦分身の阿彌陀也、隨て釋にも不レ須二更指二觀經等一也と釋し給へり』

と言て居らるゝも、夫れは所謂經は見る人毎に釋を異にするもので、日宗以外の學者間には通用し難き說である。更らに華嚴經に照して見ると、其の壽命品には『如二此娑婆世界一釋迦牟尼佛一刹一一劫一、於二安樂世界一阿彌陀佛刹一爲二一日一夜一』と云ひ、又同じく入法界品には『願我臨下欲二命終一時上面見二彼一阿彌陀一即往二生安樂刹一』と云ふもの即ち藥王品の阿彌陀と同じく、又淨經の阿彌陀と同じく見るが普通の見方である樣に思はる。蓋し日宗に取りては、未顯眞實の解釋に關する重大問題であるから力說する所あるであらうが、天下の公論は已に定まつて居る樣である。

涅槃經聖行品下に曰く、『諸佛世尊語有二二種一、一者世語二者出世語、善男子、如來爲二諸聲聞緣覺一說二世語一、爲二諸菩薩一說二出世語一、善男子、是諸大衆復有二種一、一者求二小乘一二者求二大乘一我於二昔日波羅奈城一、爲二諸聲聞一轉二法輪一、今始於二此拘尸那城一、爲二菩薩一轉二大法輪一、復次善男子復有二三人一中根上根、爲二中根人一於二波羅奈一轉二法輪一、爲上根人人中ノ象王迦葉菩薩一、今於二拘尸那城一轉二大法輪一、善男子、極下根者如來終不爲二轉二法輪一、極下根者即一闡提ナリ』

此の文は即ち法華會の後涅槃時に至りての說法で、其の趣旨殆んど無量義經のそれと同じく、二乘の爲めには世語を說き、菩薩の爲めには出世語を說くの必要を示し、四十餘年說法の跡を追ふて、遂に涅槃會座に至り、特に人中の象王と呼びて大法輪を轉せしことを說明せらる。爾前經の打消されて居らぬことが明々白々であると思ふ。

遺敎經曰、『汝等比丘、於二我滅度後一、當下尊二重珍一敬波羅提木叉一如中闇レ遇明貧人ノ得上レ寶』

此の經は入涅槃前數時の說法で特に爾前經に於る戒律の事を入念遺言せられてある、爾前經の打消されて居らぬ充分の證明である。

同經又曰『汝等比丘、於二苦等四諦一有レ所レ疑者可二疾問一レ之、無レ得二懷レ疑不一レ求レ決也、爾時世尊、如レ是三唱、時阿兜樓駄觀二察衆心一、而白レ佛言、世尊月「可」レ令レ熱日「可」レ令レ冷、佛說四諦「不」レ可レ令レ異、佛說二苦諦一實二苦ナリ一不レ可レ令レ樂ワナ集一實二是因ナリ一更二無二異ノ因一、苦若滅者即是因滅ジ、因滅故果滅ス滅苦之道一實是眞道ナリ、更無二餘道一、世尊此ノ諸ノ比丘於二四諦ノ中一決定ノ無レ疑』

是れ即ち最初の轉法輪に於て憍陳如等五比丘を度せられたる四聖諦にして（無量義經の再說とも見らるゝ）、爾前經の最なるものでは無いか、今入涅槃に臨み特に入念三唱して遺言せられぬ。其の爾前經の打消されざる確實なる證據ではあるまいか。

橋島善海曰、四十餘年未顯眞實は三乘方便一乘眞實にして爾前經は方便との打消にして彼の宗の謂ふが如きにあらず今此說の通り然り而して念佛は一乘法にて爾前三乘中の法には非ず是は他日に讀る

日宗に於ては此の遺敎經に種々理屈を付して居ると聞くも、遺敎は即ち遺敎にて、一般佛敎家は矢張遺敎として認めて居る樣である。若し日宗尙ほ理屈を以て强辯せんとせば、是亦經は見る人每に釋を異にすの部に屬せんのみ。

日蓮上人の敎義の研究は、未顯眞實の解釋が先決問題である、若夫れ其の釋が爾前經の打消にあらずと決定する時は、上人の主張は其の根本より破るゝてある。

吾輩は以上揭ぐる如く、法華涅槃及び遺敎經の文證に依りて、無量義經の四十餘年未顯眞實の文意は、他宗の學者と同じく爾前經を打消たる意味では無いと思ふ。即ち爾前經の說相の說明せられたるものであると思ふ。即ち約言すれば

四十餘年に於る諸說法は、皆是れ應機的方便說で、其の表面に眞實を顯はしたのではない。」

是れであると思ふ。此の意味を以て四十餘年の諸經を讀む時は、說相の裏面に盎然として其の眞實が見えるのである、即ち讀經に事解の外に理解の要ある所以であると思ふ。

智度論卷一曰『佛自二得道之夜一至二般涅槃之夜一、於二此兩夜ノ中間一、所レ說之經敎一切皆眞實而非顚倒一』

又以て龍樹菩薩の一の證言ではあるまいか。（中阿含經第三十四に亦同意味の文あり長ければ揭

松島善海、曰凡そ法門の解釋に廢立と融會との二門あり四十餘年未顯眞實は權實廢立又汝等所行是菩薩道と說き玉ふは前の三乘を法華一乘に開會するの義なり

げず）

日宗以外の學者の說を探るに、概ね如上の所見に等し。故に思ふ第三者より之を見るときは、日蓮上人の所見が必ずしも至當とも同ぜられぬ所がある。吾輩は他宗の人と共に、無量義經の未顯眞實の文は、爾前經を打消した意義では無いと思ふのである。

更に一言するの要あり、若しも未顯眞實が上人の解釋の如く爾前經の打消であるならば、滅後結集の時に至り、迦葉尊者阿難尊者等が何故に之を放棄せざる、之を放棄せずして彼の如く筆記して後世に傳へたるに見るも、亦打消で無い强き證據ではあるまいか。又龍樹菩薩が十住毘婆娑論を造りて華嚴方等般若等の意を述べ、大智度論を造りて般若波羅蜜多經を註釋せられたる如き、天親菩薩が俱舍論を造りて小乘經を敷衍したる如きも、亦其の證據である。

夫に就て可笑しきは、日蓮上人は爾前諸經は一言一時に打消されたりと主張しながら、安國論には金光明經大集經仁王經等を引きたること是なり、自家撞着之より甚しきはあらず。蓋し上人も後日他の難問に會ひて。

觀心本尊得意鈔（一三十二）に『於權經成佛得道の外は說相不可虛爲法華經網目なるが故也』

と苦しき辨解がせられてある、之れでは折角**開目鈔**に力說したる四十餘年諸經の打消宣傳も其の力の大部分は拔けて仕舞た譯となる、呵々。

法華初心成佛鈔（三三七）に云く『法華經を信ずる人の一期終る時には、十方世界の中に法華經を說かん佛の御許に生るべき也。餘の華嚴阿含等般若經を說く淨土へは生るべからず。淨土十方に多くして、聲聞の法を說く淨土もあり、辟支佛の法を說く淨土もあり、法華經を信ずる者は是等の淨土には一向不可生』

此の文に依るときは、十方淨土にては未顯眞實を爾前經の打消とは讀て居らぬことを、上人明かに立證して居るではないか。

下山消息（五四二）に云く『如來は未來を鑑みさせ給て、我滅後正法一千年像法一千年末法一萬年の間、我法門を可弘通人々並に經々を一々に被切當候、正法の前五百年の間は一向小乘經を可弘通迦葉阿難乃至富那奢等の十餘人也、後五百年には權大乘の內華嚴方等深密般若大日經觀經阿彌陀經等を彌勒菩薩、文殊支利菩薩、馬鳴菩薩、龍樹菩薩、無着菩薩、天觀菩薩等の四依之大菩薩等の大論師可弘通』云々

此の文は又更に明かに爾前經の打消されずして盛に應用せらるべき事を上人自ら證明して居る。

法は聞く人毎に其の解を毎にす、左の諸經說亦此の篇の參考たらずんばあらず。

維摩經曰『佛以二一音一演二說法一衆生從レ類各得レ解』

像法決疑經曰『如來ノ所說ハ總合二萬法一、一字二音ノ所レ唱、能令下衆生隨二種々類、種々根性一所レ解各異上』

稱讚大乘功德經曰、『以二一妙音一等ヲ澎二法雨於一衆會ノ無量ノ有情一昔來信二樂聲聞乘一者ハ聞ヲ佛爲二說ヲト聲聞乘ノ法一。昔來信二樂獨覺乘一者ハ聞ヲ佛爲二說ヲト獨覺乘ノ法一。昔來信二樂無上乘一者ハ聞ヲ佛爲二說ヲト無上乘ノ法一。昔來信二樂人天乘一者ハ聞ヲ佛爲二說ヲト人天乘ノ法一。』

一〇、謗法論

安國論に曰く『剩以三國之聖僧十方之佛弟一皆號二群賊一併令二罵詈一』と、吾輩は淨宗にあらざれば强て之を辯ずるの要なきも、安國論を許せんには多少之に觸れざるを得ぬ。試みに選擇集を把つて之を檢するに、三國の聖僧を以て群賊と爲したる跡を見出し得ぬ。群賊惡獸の字は善導和尙の白道喩中に見るも、同文之を前後に註し、一は群賊惡獸と詐り親むとは衆生の六根六識六塵五陰四大に喩ふと云て頗る明瞭なり。又一は安國論に引く『群賊等喚回者即喩二別解別行惡見人等一』の文にして、一瞥疑はしく思はるれども、是れ日蓮上人が故意に等の字の下『妄說二見解一迭相惑亂及自造レ罪退失也』の十五字を削りたるため讀者を惑はすも、此の十五字を加へて讀下するときは決して三國の聖僧十方の佛弟等を指すにあらずして、淨土宗の論者を指したること文意極めて明瞭である。

又同論次に法然上人の註を擧て曰『此中二言一切別解別行異學異見等一者是指二聖道門一』と、是亦日蓮上人が故意に門の字の下『解行學見也』の五字を削りたる爲め、一見紛らはしくなりたれども五字を補足せば又甚だ明瞭である。更に原文の『其餘即是淨土門』の七字を連綴すれば、即ち『此中ハ言二一切別解別行異學異見等一者、是ニ指二聖道門ノ解行學見一也其餘即是淨土門ナリ』となりて、前の善導の釋と同意義にて、愈々三國の聖僧十方の佛弟を指したるにあらずして、淨土宗外の論者を指したることが瞭然となるのである。尙ほ選擇集に就て是等の文の前段より細心讀過せば、思ひ半に過ぐるものあらん。

吾輩の研究に依ると右の通りで、日蓮上人が『以二三國之聖僧十方之佛弟一皆號二群賊一』と叫て、法然上人を謗法罪と爲すは、日蓮上人の失言と斷じ度くなる。但し安國論は固と明慧の摧邪輪の過失を受けたるものであると云ふ論者もある、或は然らん。

日蓮上人は言ふ、眞言の善無畏は天臺の一念三千の法門を盜みたりと、吾輩亦云はんとす、日蓮

上人は選擇集の十五字と五字の要文を削ると。若夫れ此の要文を削らざるときは、安國論の一角は左り立ぬと思ふ、讀者以て如何と爲す。

上人は法然上人を中心に念佛者を擧げて謗法墮地獄と罵倒す。試に思へ、南無阿彌陀佛は佛の勅命（經中有明文）南無妙法蓮華經は論師の私案（日蓮上人遺文に斯く見ゆるも經中無明文）である、佛勅の稱名を打つた私案の唱題を以てして謗法喚はりを爲すは、宛かも罪人が自の罪を忘れて他を罪人と誣ゆるに異ならず。之を要するに、我國の高僧に未だ謗法罪を以て擬すべき者を認めず、若夫れ上人の論法を借りて强て之を擬せんとせば、吾輩は上人其人を擧ぐる外なき也。

上人を謗法に擬す、其の理由前述に盡く。尙ほ足らずと云はゞ、試みに之を計へん、蒙昧の傳說を信じ自然の現象たる日月蝕、彗星、地震、飢饉、疫癘等を惡兆と爲し、不敬の文字を以て詭激の言を提起し、自己免許に上行の再生を號し、元寇を佛勅と附會し、國家は必ず亡ぶべく公言し、寺塔を燒くべく僧起を斬るべく主張し、剩へ天照大神八幡神に頭を傾け地に伏し給ふべき事なり等と狂呼し、安德天皇以下五天皇を今生には大鬼となり後生には無間地獄に墮ち給ひぬと放言して憚らず、上を畏れず下を惑はす。其の元寇に際しては、只我國の潰敗をのみ之れ期して、遂に一語の戰捷を賀する無く、爾來六百餘年其の所謂謗法を誣告せし諸宗は連綿隆昌を極めて、而して國運隆々振古無比の發展を爲す、上人を謗法に擬せずして將た誰をか擧げん、第二の理由と爲す所である。

若しも鎌倉幕府が上人の言議に動き、念佛眞言禪律等を禁じ其の寺塔を燒き其の高僧を斬りたらんには如何、然るときは元兵襲來に先ち內亂必ず起りたるならん。然かも元寇を止めるどころか却て我內亂に乘じたるやも亦未だ知るべからず。幸に幕府人あり詭辯に惑はず、使を斬て絕を示し、國論を一定して軍備を整へ以て彼の來るを待ちたるは、眞に武士的雄決にして啻に國家一時の衛護のみならず、又以て國威を千歲に耀かしたるもの也。北條氏數代議すべきもの尠からずと雖ども、時宗の此の決斷は國家の棟梁として萬鈞の重みあり、大筆特書せざるべからず。此等の方面より觀察するも、上人の安國論幷に其の元寇に對する脫線的言論は、寧ろ其罪の輕からざるを思ふのである。

同胞にして多少なりとも我歷史を讀む者、時宗の雄斷を讚せざるは無かるべし。日徒と雖ども當時幕府が僧を斬り寺を燒きたらんには、元寇を止めたりとはよも考へざるべし。思へ元寇は元の勢力である、僧を斬るも來る斬らざるも來る、上人の所謂謗法とは何等關するものにあらず。由是觀之は安國論は早く己に時宗の英斷の爲めに破れたりと謂ふを得べし。尙ほ元使を斬りたるに對する上人の意見は後に出す。（元寇に對する上人の態度參照）

日蓮主義者が上人を崇敬するもの、主として當時の權威に懼れず身命を捧げて法華經の爲に奮鬪

せし勇氣と精力とに在るならん。吾輩亦其の勇猛如何にも男兒らしき處には敬虔の意を表すべくも其の言議に至りては、遺憾ながら贊成する能はざるもの多し。況や言動常軌を逸し皇室に對し不敬を顧みず傍若無人雜言無禮、尙況や開闢以來の國難に方り非國民的の言論を敢てし、只法華經ある を知りて國家の危急を輕んじたる如きに至りては、反對せざらんと欲するも得ず。日徒或は言はん上人の國家を思ふ尋常にあらず、其の言議の詭激に涉るを觀て國家の危急を輕んじたりと爲すは、未だ以て上人の精神を知らざるなりと。余輩は之に同意するを得ず、そは後に（元寇に對する上人の態度）出す上野晴光に與へたる書の如き、光日上人への返書の如き、國家存亡の秋に當り許すべからざる非國民的文字と斷ぜざるを得ざればなり。

偶ま大日本史を繙きて、時宗の贊を得たれば、之を掲げて讀者と共に當時を追懷せんと欲す。

『北條時宗元使杜世忠、何文著等を斬る、或は疑ふ、是れ元主の怒を激し、其の兵を速くなり、烏ぞ可ならんやと。曰く然らず、彼れ强大の勢を挾み以て我に臨む、我れ屈伏して以て之に事へなば、彼れ將に我に責るに稱藩朝貢を以てし、凌辱誅求厭くこと無からんとす。夫れ赫々たる天孫の胄、瑞穗に臨御し、天に代て民を子とするの道、固より彼れに假す無し、而して夸辭を張り、以て我れを脅制す、是れ我れを蠻夷にせんと欲するなり。時宗其の使を執て之を戮し、威武を宣揚して外國を震攝す、其の擧甚だ善し、彼れ怒を我に洩さんと欲すれば、我固より備あり、將を選び卒を蒐め、沿海に屯戍し、軍國の需め一として闕くる所無し、故に元主大に舟師を興し來冠するも、率ね志を得る能はず。神明の佑に由り颶風大に發し、戰艦覆沒すと雖も、亦時宗堅志不拔と防禦宜きを得るの致す所となり、元主創荛再擧する能はず、永く西陲の虞無し、時宗の功亦偉ならずや。（原書漢文）

一一、日蓮上人の暴言

日蓮上人の暴言は遺文錄に溢る枚擧に遑あらず

種々振舞鈔（四〇三）に云く『僅の天照大神正八幡なんと申すは此の國には重けれども、梵釋日月四天に對すれば小神ぞかし、されども此の神人なんどをあやまちぬれば、只の人を殺せるには七人半なんど申すぞかし、太政入道隱岐の法皇等の亡び給ひしは是也、此はかれには似るべくもなし、敎主釋尊の御使ひなれば、天照大神正八幡宮も頭をかたぶけ手を合せて地に伏し給べき事也』

同鈔（三九五）に云く、『大蒙古國より此の國を責むるならば、天照大神正八幡とても安穩にを

はすべきか』

諫曉八幡鈔（三七七）に云く、『八幡大菩薩は應神天皇小國の王也、阿闍世王（五逆の大惡王）は摩竭大國の大王也、天と人と王と民との勝劣也』

同鈔（三八二）に云く、『隱岐の法皇は名は國王、身は妄語の人也横人也』

同鈔（三七七）に云く、『當レ知彼の國の大王（元主忽必烈）は此の國の神に勝れたる事明らけし』

內藤書（一一一九）に云く、『八十一（安德）八十二（後鳥羽）八十三（土御門）八十四（順德）八十五（仲恭）の五主は、或は西海に沈み或は四海に捨られ、今生には大鬼となり、後生は無間地獄に落ち給ひぬ』（妙法比丘尼書に亦同樣の文あり）

皇室に對し大不敬大不謹愼の暴言、如何に法華經の行者と言ふと雖ども、苟くも日本臣民として口にすべき言であらうか。其の事六百餘年の前にかゝるの故を以て、官憲亦之を不問に置くもの乎若し今日の僧侶にして斯くの言を爲したらんには、豈に安然たらしめんや。吾輩は思ふ事數百年の過去に屬するも、今日之が文字を留め日蓮遺文錄に上版して縱ほゝに世人に讀ましむるは、豈に政敎を紊り治安に害無しとせんや。恐くは彼の基督敎徒が御眞影を拜するに屑よからざると聞くより以上の次第ではあるまいか、讀者以て如何と爲す。

上人が崇拜したる摩竭陀國王は國と共に滅びて跡方もなし、不敬の言を敢てして小國の王と輕蔑し奉りたる我天皇陛下は、今や一等國の君主五大强國の皇帝とならせ給へるにあらずや、上人地下に如何か謝罪し奉るや。

兵衛志書（九二九）に云く、『安德天皇と申す大王、天台座主明雲等の眞言師等數百人をかたらひて源右將軍賴朝を調伏せしかば、還著於本人とて、明雲は義仲に切られぬ、安德天皇は西海に沈み給ふ』

八歳の陛下を詈り奉る、我國の歷史を知るる者誰か首肯する者ぞ。

撰時鈔（一一一八）に云く、『日蓮は當帝の父母、念佛者禪衆眞言等が師範なり又主君なり』

賴基陳狀（五七六）に云く、『隱岐の法皇の御時禪宗念佛宗出來して、眞言の邪法に打加へて國中に流布せしかば、天照大神正八幡の百王百代の御誓ひ破れて王法既に破れぬ。關東の權大夫殿に天照大神正八幡の御計ひとして國を授けさせ給ひぬ、爰に彼の三邪法關東に落下り、存外に御歸依ある故に、梵釋二天日月四天成レ瞋、先代未聞の天變地夭を以て諫むれども用ひ給はざれば、隣國に仰付けて法華經レ誹謗の國を責めさせ給ふ、然る間天照大神正八幡も力及び給はず』

妄言不理屈本氣の沙汰とは思はれず、之を評し之を筆誅したくも其事神明と皇室に關し餘り畏多

くて筆を下し得ぬ、讀者諸君子察する所あれ。因に云、孔明の出師の表を見て泣かぬは男兒にあらず、日蓮の上來の言を聞き憤らぬは日本臣民にあらずと。

撰時鈔（一三〇）に云く、『結局は法然流罪をあだみて惡靈となつて、我並に弟子等を科せし國主山寺の僧等が身に入り、或は謀叛を起し或は惡事をなして皆關東に亡ぼされぬ。僅かに殘れる叡山東寺等の諸僧は、俗男俗女にあなつらるゝこと、猿猴の人に笑はれ俘囚が童子に蔑如せらるゝが如し』

又云く、『禪宗と申す宗は中畧日本國の中に不孝にして父母に捨られ無禮なる故に主君に勘當せられ（孤山云上人亦其一人）、或は若なる法師等の學問に懶き遊女の物狂はしき本性に叶へる邪法なる故に、皆一同に持齋になりて國の百姓を啖らふ蝗蟲となれり、然れば天は天眼を怒らかし地神は身を震ふ』

又云く、（一四五）『建長寺、壽福寺、極樂寺、大佛、長樂寺等の一切の念佛者禪僧等か寺塔を燒拂ひ、彼等が頸を由比濱にて切らずば日本國必ず亡ぶべし』

上人の暴言枚擧に遑まあらず、其の二三を出すも右の通りである。自分は勝手に暴言しながら、偶ま選擇集に群賊の字あれば之を棒大に論述して、（蓋し誤解より）謗法である無間である、寺を燒け頸を切れと咆哮す、第三者より之を見るときは、論評を超過して遂に笑となる。

尙ほ淨土宗に對する惡口の一例を出せば

新池消息（六〇五）に云く、『現在の主師親たる釋迦佛を閣き、他人たる阿彌陀佛の十萬億の他國へ逃げ行くべき由を願ひ、虛言の四十八願を立て給ひたりしを愚なる人々實と思ふて、物狂はしく金拍子を叩き躍り跳ねて念佛を申し、親の國をば厭ひ出ぬ、來迎せんと約束せし阿彌陀の約束の人は來らず、中有の旅の空に迷ふて謗法の業に引かれ、三惡道と申す獄屋へ赴けば獄卒阿防羅刹悅をなして捕へ搦めてさいなむ事限なし』云々

要之に以上掲ぐる所皆是れ自家の所說を强めん爲めの激語なるへし、深く咎むるにも及ばざるべきも、併し日蓮上人を研究せんには、又其の一面觀として豫め之を知悉し置くの要ありと信ずるのである。終に臨み聞捨て難き一文を發見す

下山消息（五六二）に云く、『敎主釋尊よりも大事なる行者の日蓮を法華經の第五の卷を以て頗を打つ』

是れ松葉が谷の草庵に於て捕縛せらるゝときの事なるべし、死物狂の言寧ろ憫むべきにあらずや。

一二、捨閉閣抛と四個格言

日蓮上人は法然上人の選擇集の中より捨閉閣抛の四字を拾ひ上げて、法然上人を謗法者と罵倒すれども、是れ蓋し念佛を以て絶對の信仰と建る以上は、前にも述べたる如く自然に來るべき結果と思はる、敢て咎め立る程のことてもあるまい。強て言へば此の四字稍不穩當と云ふに過ぎず。捨閉閣抛を一面より考ふるときは、禪宗の教外別傳不立文字も相似たる譯ではあるまいか。之に反し日蓮上人が四個格言と稱して『念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊』と呼ぶも、他宗學者の所說を聞くと所謂經は見る人に依りて其の解を異にするものにて、畢竟上人が彼の未顯眞實の別解と、選擇集中の誤解等より來る結果にあらざる無きを得んや。之を要するに、爾來六百餘年念佛禪眞言等の成績が相當に國家を裨益して更に害毒抔云ふ跡無きに見るも、其の格言にあらずして寧ろ妄言にてありしことが證據立らる。何れの宗旨にても自家の爲には多少排他の傾きは免れざるも、日蓮上人の自尊排他は餘りに過度、餘りに激烈（燒け殺せの類）、加ふるに君子の聞くを厭ふ惡口雜言讒謗罵詈を事として、幾百年來學者間に狂人視せられ相手にせられざるや久し。現今に在りても上人の遺文錄を見る者多からざるは是が爲の故であると思ふ。殊に其の四個格言に至りては他宗に對し分毫の利目無きのみならず、却て冷笑の的となりたること、六百餘年を經て自然的に確定せられたである。村上博士曾て曰く『吾輩嘗て前田慧雲博士に物語るに、どふいふものか日蓮を研究する氣になれぬといふことを以てした、于時博士は已れもさうだと謂はれた。又天臺宗の學頭故櫻木谷慈薫氏にも此事を以てした處が、同感のやうであつた。之を要するに日蓮宗といふ宗旨は古來其の宗門の人にのみ研究せられ、他宗の人は措て問はぬ宗旨である。蓋し是れ日蓮其人が所謂四個格言の調子を以て他宗を罵倒して開かれた宗旨であるから、他宗の人は喰はず嫌ひに陷つたものと見える』と。又谷本博士は犬の糞を除けて通ると一般に之に觸れず（其の意を摘む）と言ふて居る。又以て多くの學者が日蓮宗を見る態度殊に彼の四個格言に於る評價の如何が知らるゝではあるまいか。

一三、後五百歲と傳教大師の空想

藥王品曰、『我滅度後、後五百歲中廣宣流布於閻浮提』

日蓮上人は此の囑累文を深く信じて、後五百歲には法華經が日本國中に、而かも上人に依りて必ず廣宣流布すべく生涯を賭して絶叫した（日蓮は法華經行者にあらざる乎或は經文の如く實現せざれば佛は妄語の人抔と幾度となく繰返して）。然るに上人在世に一向流布せざるのみか、今や後五

百歳を過かに過ぎて更に廣宣流布の實擧らず。所謂閻浮提なる地域は已に研究せし如く須彌四洲の一なる南閻浮提を謂ふので、須彌と共に夢の如く幻の如く想像だも及び難き次第にて、上人が多くの場合に謂ふ如き日本孤島を意味するにあらず。抑々壽量品に於る絶對的久遠偉大の本佛が、法界中芥子大にすら當らざる地球の然かも其の一部分たる日本孤嶋に、彼の如き宏大無邊なる法華經を特に廣宣派布すべく屬累せられしと解するが謬りではあるまいか。但し斯る宏大なる佛教が僅か印度の一角に局限して、歐米にすら普及せざるを見るときは、所謂龍頭鼠尾的に先づ日本島迄位に及ぼさんとせられたるかは知らざれども、抑々不可解千萬である。

日蓮主義者は曰く一天四海皆歸妙法と、何等の空想ぞ、佛にして前述の如くなるに敢て之を能くすと謂ふ乎。佛は法を說くと同時に法の滅盡をも併せ說く、法滅盡經則ち其一である。法と雖ども年代の下るに隨ひ、漸次滅盡に向ふべきものたるを示さる。然るを日徒は其の佛命に從はず、更に發展して一天四海に及ぼさんと期す、無謀と謂はんか遠勅と謂はんか、如何に理屈を講ずるも到底出來ぬ相談である。或は云はん否々法滅盡經は爾前經である、未顯眞實と打消されてあると。吾輩又云はん、上人已に上に出せる如く（觀心本尊得意鈔（一三二一）に於て『於二權經一成佛得道の外は說相不レ可レ虛』と、其の自らの打消を又、自ら打消して居らるて無いかと。

日蓮上人は屢々傳教大師の秀句を引きて曰く『語レ代則像レ終末レ初、尋レ地則唐レ東羯レ西、原レ人則五濁之生鬪爭之時』と大師の豫言定めて典據あることならん、大師は深く自ら信じて後五百歳に生れざりしを遺憾とせられた。然るに大師の此の豫言も全く外れて、後五百歳は愚か今日に至るも更に事實に擧らず（日蓮上人は實現せりと想ふたれども）。而かも佛教界は着々として法滅經の豫告通り少しも違はず、滅盡道程を進みつゝある、傳教大師地下に在りて如何が見る。

重て云ふ、上人が安國論に引きたる諸經の文及び勸持品の偈の如き、一々適中せし如く言ふたれども、多くは空想てあつた。然るに滅盡經の豫告が歷々現代に的中しつゝあるは、現實に於て爭ふべからざる所である。佛教の將來を洞察せねばなるまい、此の時に方り日蓮主義者が法華經の廣宣流布を主張し皆歸妙法を夢む、時代後れとや謂はん。吾輩は言はん、一天四海は愚か日本國内に於て、各宗を打破して法華一宗と爲さんことすら斷じて不可能と。否法華宗内に於て派別を破りて歸一せしむることすら容易にあらずと。

抑々宗旨派別は機類に因緣す、蓋し教學上自然的結果ならん。吾輩は思ふ、人に機類の異ある以上は宗旨派別は寧ろ必要の存するものありと。見よ禀性禪機ある者は如何に說くとも動かす能はず禪宗の要ある所以てある。滔々たる凡流到底中道を以て理解せしむべくもあらざれば、念佛の善巧

方便亦頗る必要である。人は其の顏貌の異なる如く各其の意見を異にす、信教自由の天下何の顧念かあらん、宜しく各自の欲する所に從ふべきなり。往生も成佛も急いて急がぬ、只緊急の要は正しき人と成るに在り。未顯眞實を正當に解釋すれば、宗旨派別の自然的なることも能く分ると思ふ、尙ほ後に至り述ぶる所あらん。

因に云、日蓮上人は法華經中の豫告的文句を自己に體現せる如く言明す、藥王品に云『若有人聞是藥王菩薩本事品一、能隨喜讚善者、是人現世口中常出青蓮華香、身毛孔中常出牛頭栴檀之香』と、上人は藥王品を見て能く隨喜し善と讚する者ては無いか、何故に諸香を出さゞる、上人屢々云『日蓮は法華經の行者にてはあらざる乎』と、今此の一事を以てするも其の疑團は氷解すべきてはあるまいか。

一四、日蓮上人の輕信

日蓮上人は正直過度なるか故か、何も彼も信じて掛る、今其一二例を擧げんに

諫暁八幡鈔（三七二）に云く、『扶桑記云（孤山云桑桑記と云ふもの余未だ見ず扶桑畧記には見えず或は託宣集にあらんか）傳教大師奉爲八幡大菩薩、於神宮寺自讀法華經、乃聞竟ヲ大神託宣、我不聞法音久歷歳年、幸値遇和尙得聞正教、兼爲我修種種功德、至誠隨喜ス、何足謝德矣、兼有我所持ノ法衣、即ヲ託宣ノ主自ラ開寶殿、手ヲ捧紫ノ袈裟一ヲ紫衣一ヲ奉上ス和尙、大悲力ノ故ニ幸垂ヲ納受、是時禰宜祝等各歎異ス云、元來不見不聞如是奇事哉、此大神所施法衣今在山王院也』云云

今日誰か斯る文字を信ずる者ぞ、上人は是を武器として冗長なる文を連ねて八幡神を譴責して居る、餘り馬鹿氣て讀む能はず。因に云く、慧心僧都の傳に曰く『某年伊勢の神廟に詣し出要を示さん事を祈る、乃ち靈告を蒙る曰く、末法の要法彌陀を念ずるに如くは無しと』呵々。八幡神は法華經に隨喜し給ひ、天照大神は念佛を勸め給はる。これでは上人が參拜せし時何等の託宣も無かつた筈てある。

同鈔（三七七）に云く、『清丸八幡大菩薩に祈請せし時八幡の御託宣に云、夫神有大小好惡、乃至彼衆我寡、邪强正弱、乃當仰佛力之加護爲紹隆皇緒、云々當知八幡大菩薩は正法を力として王法を守護し給はる也』

上人は龍の口に牽るゝに方り煩悶の餘、鶴ヶ岡八幡宮に側杖を當てゝ、何故に此の際出てゝ日蓮を救はれざるやと詰責し、後尙ほ忘れず是の如き怪しき文書を證據と爲し、尙ほ且つ付法藏經の尾

俱律陀が樹神に祈りて瞋念を生じたりと云ふ、極めて怪奇なる天竺傳說を引き八幡神を理屈責に爲さんとする、本氣の沙汰とは思はれず。彼の東嶺和尙が無盡燈論に寶基本紀を引く亦此の類なり。上人若し見は必ず喜び引しならんも、蓋し知らざりしが如し。

智妙房書（七九〇）に云く『大隅の正八幡の石の銘には一方には正八幡と申す二字、一方には昔在二靈鷲山一說二妙法華經一今在二正宮中一示二現大菩薩一等云云、月氏に候ては釋尊と顯れて法華經を說給ひ、日本國にしては八幡大菩薩と示現して正直の二字を願に立給ふ』

上人は斯の如きもの迄も信用して掛る。又上人は屢々末法燈明記を引かれた、本書の僞作たるや今や問題にあらず。

甚しきに至りては、次の如き事までも信じて居らるゝ（前揭の再出）

法華取要鈔（二三七）に云く、『佐渡國土民ロロに云、正月二十三日申時西方に二つ日出現す、二月五日東方に明星二つ竝び出づ、其の中間三寸許りと、此の大鏘は日本國先代に未レ有レ之歟（孤山云如是の風說を信じたる者日本國先代に未レ有レ之歟）

上人屢々傳敎大師の語を引き誡めて曰く『依二憑佛說一莫レ信二口傳一』と、而して矛盾如此、論評の限りにあらざる也。

上人の遺文錄中、佛典儒書稗史小說あらゆる書籍に亘り種々の怪談戯說を把へ來つて一々信じて證據と爲す、愚物は或は一時悅ばん、君子は聞くを厭ふ。

要するに、斯の如き些事も亦上人を研究するに、豫め知悉し置くの要ありと思ふ。

一五、日蓮上人の自負

閻浮提を縮小して日本の如くに考へたとは前に已に述べたり。上人は勸持品の二十行の偈を見て自分の爲となし『日蓮だにも此國に生れずば世尊は殆んと妄語の人』と言ふて居る。然るに法華經は上人の考へたる如く、日本國に廣宣流布せざれば世尊は即ち妄語の人にてありしか。苟も經を讀む程の人にして誰れか首肯する者ぞ、畢竟閻浮提を縮小したるの謬に坐す。

開目鈔下（六八）に云く『三類の敵人必ず日本國にあるべし』と是亦閻浮提縮尺より來る空想である。

又（七三）に云く『抑も誰の人か衆俗に惡口罵詈せらるる、誰の僧か刀杖を加へらるゝ、誰の僧か法華經の故に公家武家に奏する、誰の僧か數々見擯出と度々流さる、日蓮より外に日本國に取出さんとするに人なし』

と若夫れ上人是等の諸難を嘗め盡して、而後始めて法華經を讀んで斯く云はゞ、人亦多少の同情をよするならんも、今上人は否らず、先づ法華經を反覆熟讀して、而後其の文意に該當すべく行動して、而して曰く日蓮は法華經に於て佛の豫言に適當する者であると、狂人にあらずして何ぞ。

觀心本尊鈔（一〇〇）に云く、『地湧千界（上行、安立行、淨行、無邊行の四菩薩等）は末法の始に必ず出現すべし』

と後に日蓮が即ちそれであると云はんとする前提である。

又（一〇三）云く、『今末法の初め小を以て大を打ち（選擇集を云）、權を以て實を破し（淨土三部の外捨閉閣抛するを云）東西共に之を失し天地顚倒せり、迹化の四依は隱れて現前せず、諸天は其の國を弃てゝ守護せず（上人の理想）此の時地湧の菩薩始めて世に出現し（上人自ら上行を以て任ず）但妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ（中略）當に知るべし此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王（元主忽必烈を云）と成つて愚王（主として北條時宗を云）を誡責し、攝受を行する時は僧（上人自任）と成つて正法を弘持す』

と其の自負如何ぞや、特に可笑は同書に（一〇四）又云く、

『上宮四天王寺を建立するに、未だ時來らざれば阿彌陀他方を以て本尊と爲す。聖武天皇東大寺を建立し給ふにも花嚴經の敎主也、未だ法華經の實義を顯さず。傳敎大師粗ぼ法華經の實義を顯示す。然りと雖ども時未だ來らざるの故に東方の鵞王を建立して本門の四菩薩を顯さず。所詮地湧千界の爲に此を讓り與ふるが故也（其の意日蓮の出るを待てりとなり）（中略）此を以て之を惟ふに、正像に无き大地震大彗星等を出來する此等は金翅鳥修羅龍神等の動變に非ず（其の愚及ぶべからず）偏に四大菩薩出現せしむべき先兆なる歟（其の意日蓮が上行菩薩として出づべき前兆であるとなり）

其の自負自惚如何ぞや。但し地震彗星が五色八虹六種震動に等しからざるは前已に之を述べたり。三昧發得を以て內證とするは佛敎の特色であるから、報恩鈔（一九一）に『過去の燈明佛の時より法華經を講せし光宅寺の法雲法師はと云ひ、靈山に面り聞召ありし天台大師とは』云ふが如きは、深く論ずるに及ばざるも、三大秘法書（二四一）に『此の三大秘法（本尊、戒壇、題目）は二千餘年の當初、地湧千界の上首として日蓮慥かに敎主釋尊より口決相承せし也』と全く上行菩薩と成り澄したに至りては驚かざるを得ぬ。

撰時鈔下（一四一）に云く、『日蓮は日本第一の法華經の行者なる事敢て疑ひなし、此を以て推せよ漢土月支にも一閻浮提內にも肩を幷ぶる者はあるべからず』

と此の數枚擧に遑まあらず『我身法華經の行者にあらざるか』とは上人生涯に幾度も繰返したる囈語であつた。此の囈語は六百餘年後の今日に至つて、遂に法華經の行者にてあらざりしと確定せられた。

同鈔（一五〇）に又云く、『法華經の八卷に云、若於二後世一受二持讀一誦是經典一者、乃至所願不レ虛、亦於二現世一得二其福報一、又云若有四供二養讀一歎之一者、當下於二今世一得中現果報上等云云、此の二の文の中に亦於現世得其福報の八字當於今世得現果報の八字已上十六字の文、空しくして日蓮今生に大果報なくば、如來の金言は提婆か虛言に同じく多寶の證明は瞿伽利が妄語に異ならじ。謗法の一切衆生も阿鼻地獄に墮べからず、三世の諸佛もましまさざるか。されば我弟子等試に法華經の如く身命も惜まず修行して此度佛法の定否を試みよ』

上人斯くまで法華經を信じたるも唯艱難の重なりたるのみにて、何等福報を受る所も無く此の文を草して後七年遂に示寂せられたり。

因に云、磯野氏は吾輩の此の說を駁して曰く『氏の眼には聖人は何等福報をも感受するなく艱難の間に一生を送れりと見ゆるならんも、之を聖人自身に問へば、必ずしも其の然らざるを知るとて、四菩薩造立鈔（三五九）の『日蓮は世間には日本第一の貧き者なれども、以二佛法一論すれば一閻浮提第一の富る者也、是れ時の然らしむる故也と思へば、喜び身にあまり感涙難レ押、恐くは付法藏の人々も日蓮には果報は劣らせ給ひたり、天台智者大師傳敎大師も及び給べからず』の文を引き、聖人の果報勝ると稱するもの固より物質的に富樂を極むと云ふにあらずさり乍ら精神的若くは出世間的の富樂に於ては比肩すべき者あるなきは、斯文に於て最も彰著なりと云はずんばあらず、是豈に得現大果報にあらずや』と言はれたるも、是れ未だ以て上人の心相を知りたるものと云ふ可からず。

吾輩が引く所の撰時鈔の文は、其の末節の『我弟子等試に云々』の言に見るも、當時上人が世間的滿腔の不滿不平の餘に發したることは明かである。而して磯野氏の引ける四菩薩鈔の文は精神上の滿足を述て居らるゝ、是則ち上人心事に於る世間と出世間との兩方面である。丁度開目鈔の上卷に於て『日蓮法華經の爲に謗法者の折伏に盡すも、唯難のみ重りて一も佛神の加護を蒙らざるは、日蓮が法華經行者にあらざる乎』（摘意）との嘆息を三度迄も繰返し、而して其の下卷には『當世日本國に第一に富る者日蓮なるべし命は法華經に奉り名をば後代に留べし』と滿足の語を發して居ると同一のことである。斯の如く上人には世間と出世間との兩方面あることを知らねばならぬ。今吾輩の出したる撰時鈔の文を回護するに四菩薩鈔の文を以てす

るは、宛かも開目鈔の上卷に於る不滿不平の言を、下卷の滿足語を以て打消んとするに同じくして、上人の世間出世間兩方面を混同したるものである。上人には斯の如く兩方面があつて、而して其の出世間滿足を漏したるは餘り多からざりしも、其の世間的不滿不平は殆んど生涯を通じ殊に佐渡以後に於て甚しくあつた。

元來出世間に滿足すれば世間的不滿不平は自然に消ゆる筈なるに、上人は然らずして時々出世間滿足の語を漏しながら、殆んど生涯を通じて世間的不滿に煩悶したのである。『國主日蓮を惡みて念佛眞言師等を方人とせらるれば天怒らせ給ふて天災も起るなり』とか、『是偏に爲レ失ニ日蓮一無ろう事を造り出さん事兼て知る』の類、其の一例である。之を一言に云へば遺文錄中の大部分は此等不平の繰言で滿されて居る。

尙ほ磯野氏に問はん、氏の說の如くんば、吾輩の引きたる撰時鈔に於る法華經の八卷の文を精神上即ち出世間のことゝ解せざるべからず、今一度其の文相を點檢せられたし、豈に之を精神上出世間とのみ解し得べき哉、若し夫れ此の文を出世間のことゝ解せば、前に出せる（後五百歲と傳敎大師の空想の一節）藥王品の文も、亦精神上出世間のことゝ解すべきか、如何。

上人曰く『我れ日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん』と何が柱と爲つたか、何が眼目と爲つたか、何が大船と爲つたか、日宗以外只物笑の種となり終たである。日徒若し否々柱と爲つた眼目大船と爲つたと言はゞ、それは恰かも眞言の徒か弘安四年の大風を日蓮上人の否定せるに係はらず、眞言祈禱の効驗であると主張すると一般のことゝなる。之を要するに、六百餘年を通じて唯上人一個の空想に終りて、遂に法華經の廣宣流布を見るに至らず（僅か現代に於る以上に）、自負自任の囈語者、露骨に評すれば法華經狂者に了たてある。

一六、元寇に對する日蓮上人の態度

日蓮上人は文應元年七月に宿屋入道に依りて、安國論を北條時賴に呈した。時賴は當時道元禪師に師事し又元庵和尙に參して、禪的悟道に入つて居り建長寺も新築した折柄に、青年僧の日蓮より上書の體裁をも具備せざる不敬極まる論文を受取りたるを以て、大に怒つて上人を伊豆に流した、又無理からぬ事と思はる。

上人は其後三年を經て、弘安三年二月に赦免せられて鎌倉に歸ると、其年の十一月に時賴は薨した。翌文永元年七月には大彗星を見、五年十月には元の使節が來た。そこで上人は、それ見たか

念佛禪眞言等を禁止せざるを以て佛罰たる他國侵逼難が始まつたと爲し、書を時宗に上つた。其の文字の猛烈なる次の如くで、日蓮上人の性格を見るに足るものがある。

謹令言上候抑正月十八日西戎大蒙古國の（此の大の字後の小の字と對照の要あり）牒狀到ルト日蓮先年（九年前）集經の要文勸之如立正安國論少も不違普合シヌ當日蓮聖人の一分知未萌故也、然間重而奉驚此由急止フレモ建長寺、極樂寺、淨光明寺、大佛殿の御歸依不然者重而又自西方可責來也速調伏蒙古人而令安泰我國給（被彼調伏事非日蓮不可叶也（中略）日蓮申事無御用者定テ後悔可有之日蓮者法華經の御使也、經曰則如來の使ナリ如來の所遣行如來の事三世諸佛の事者法華經也、集一所有御評議可預御報候所詮拋萬祈召合諸宗於御前決佛法の邪正給」云々

其の外彼の有名なる十一通の書を發した。

讀者諸君、日蓮上人をして調伏の祈禱を爲さしめたならば、果して蒙古の襲來を阻止し得たであらうか。此の書及十一通放言の結果は、龍の口の刑場となり佐渡の流罪と爲つた。

又上人が文永六年の書には左の文がある。

「日本一州上下萬人一人もなく謗法なれば大梵天王帝釋並に天照大神等隣國の聖人（元主忽必烈）に仰付られて謗法をためさんとせらるゝか（中略）例せば震旦高麗等は天竺に次では佛國なるべし彼の國々禪宗念佛宗になりて蒙古に亡ぼされぬ（誰か首肯する者ぞ）日本國は彼の二國の弟子なり二國の亡ぼされんに豈に此の國安穩なるべしや」（法門可申事、七四五）

是れ安國論の內容敷衍と見るべきである。前には僅かの天照大神とか應神天皇は小國の王也抔と妄言し、今は元主を稱して聖人と言ふ、讀者以て如何と爲す、之を讀みて憤慨せざる者は帝國の臣民にあらず。

因に云、日徒は辯護して曰、日蓮上人が我國の亡ぶべく云ふ者は、眞の亡國の義にあらず只精神上に於ける亡國を云ふのみと。此の文を讀みて如何か辯せんとす、尙能く後出の書を見よ。

又建治元年には

「日蓮は一閻浮提第一の聖人也上一人より下萬民に至る迄之を輕毀して刀杖を加へ流罪に處する故に梵と釋と日月四天と隣國に仰付けて之を逼責する也。設ひ萬祈を作すとも日蓮を用ひずんば、此國今の壹岐對馬の如くならん（昨年元兵侵對馬壹岐）我弟子仰て之を見よ」（聖人知三世五一三）

又同年及三年には左の文がある

『蒙古人の頸を刎られ候事承り候、日本の敵にて候念佛禪律等の頸をば切られず科なき蒙古の使の頸を刎られ候事こそ不便に候。日蓮をだに用ひられ候ハマシカハ、蒙古國の朝使の頸をば切らせ進らせ候はじ、くやしく御座すらん』（蒙古使書一〇四三兵衛志書九二九）

是亦日蓮を用ひたならば、元使も斬らず元寇も來らざるべしとの意味である、讀者諸君以て如何と爲す。

上人は元寇は鎮西に止まらず、日本の津々浦々迄も前年の壹岐對馬同樣に蹂躙せらるべく考へて居たことは、遺文錄中處々に見ゆるが、建治二年五月十一日附を以て故鄕安房國淸澄寺への書翰は最も其事が分かる。

『今ハヨシ後を御覽せよ、日本國は當時の壹岐對馬の樣に成候はんずる也、其時安房國に蒙古が寄せて責め候はん時、日蓮房の申せし事の合たりと申すは、偏執の法師等が口ヲスクメテ無間地獄に墮ん事不便也不便也』（淸澄書七九五）

又其の撰時鈔（一一八）に曰く、

『蒙古の攻めも亦斯くの如くなるべし、設ひ五天の兵を集め鐵圍山を城と成せりとも協ふべからず、必す日本國の一切衆生兵難に値ふべし、されば日蓮が法華經の行者にてあるなきかは此にて見るべし』

又同鈔（一四四）に曰く、

『今ニシモ見よ大蒙古國數萬艘の兵船を浮べて日本國を攻めば、上一人より下萬民に至るまで一切の佛寺一切の神寺をば拋けすてゝ、各々聲をツルベテ南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へ掌を合せ助け給へ日蓮の御房日蓮の御房と叫び候はんずるにや』

と。又元兵襲來の前年即ち弘安三年七月二日附上野晴光に與へたる書の如きも、上人の心事を見るに足るものあり、

『鷹は鷲につかまれ毗沙門は修羅に責らる、其樣に當時日本國の樂しき人々は蒙古國の事を聞いては羊の虎の聲を聞くが如し。また筑紫へ赴きて、いとをしき妻に離れ子を見ぬは、皮をはぎ肉を破るが如くにこそ候らめ。況や彼國より押寄せなば、蛇の口の蟇(カエル)𠮟丁師がまな板に置けるなまゝ鯉鮒の如くこそ思はれ候らめ。今生はさて置きぬ、命ち消へなば一百三十六の地獄に墮て無量劫を經べし』（上野書一〇〇三）

如何に法華經の爲とは云へ、又日徒の所謂內心國家を思ふにせよ、此の開闢以來の國難に方り、斯くの言を敢てして得々たる、之を非國民とや謂はん不忠者とや稱せん。若し日露日獨役に際し如斯

の放言を爲す者ありたりとせば果して如何。武士道より言へば、先づ斬て血祭りと爲すべきてはあるまいか。蓋し上人も多少良心の咎めを感じたるものか、此の書の末に

『人に知らせずして、ひろかに仰せ候べし』

と追記してある。

さて愈々弘安四年の六月となりて、元兵十二萬軍船三千五百隻博多灣頭に襲來と聞くや、上人は豫言適中と爲して得意絶頂に達し、それ見たかと言はん斗りに、門弟及檀越に向つて左の如き奇怪千萬なる廻章（小蒙古書六二一）を發した。

『小蒙古ノ人寄ヲ來ル大日本國ニ之事、我門弟並ニ檀那等ノ中ニ若向テモ佗人ニ將々又自ラ云モ不レ可レ及ニ言語ニ、若違ニ背セバ此旨ニ可レ離ニ門弟ニ等ノ由所ニ存知スル也、以ニ此旨ニ可レ示ニ人人ニ候也。

弘安四年大歳辛巳六月十六日　花押

人人御中

此の書に就ては從來諸説紛々たり、近くは姉崎博士其の他の推測辯護説もあるが、上來掲る所の文書を以て上人の心事を忖度する時は、上人自ら豫言の的中を誇りて幕府他及宗等に對して、俚言の所謂面當（ツラアテ）にそれ見たか（上人曾て云今ニシモ見よ大蒙古國數萬艘の兵船を浮べて云々撰時鈔一四四）と言ふ風に、自の全勝の得意を發表したてあると思ふ。其の小蒙古人寄ニ來大日本國ニとは主として幕府に當こすり（諷刺或諷示）の語にて、其の意に念言すらく從來我力の程も知らずに此の小國を（應神天皇は小國の王云々前に出す）大國の如く考へ、敢て使節を斬つて暴虎憑河匹夫の勇を奮ひ國の亡ぶることも知らぬと叱責したのてある。即ち汝等の思ふ小蒙古人か汝等の念ふて居る大日本國へ押寄せて來たぞと、故らに大小を顚倒して嘲弄的叱責的に書き示して愈々それ見たかの意を强くしたものと思はる、即ち面當の反語である。『諫曉八幡鈔』に日蓮一分の失無くして南無妙法蓮華經と申す大科により云々と言ふ如きも面當の反語である、又『種々振舞鈔』に龍の口の刑場に於て如何に殿原大禍ある召人をば云々と呼べる大の字も同一の用語である（其の例多々あり）上人は斯の如く常に反語使用の癖がある。其の門弟等に此の際沈默を守るべく嚴命したるは、愈々豫言の全勝なるを以て汝等は此の際何も言はずに默て見て居れ、今にしも見よ（前出撰時鈔一四四）全國の津々浦々に安房國（前出の清澄寺への書對照）迄も大慘狀を現じ來るぞと、故らに沈默を命じて得意を誇つたものてあると思はる。

尙ほ其の得意を誇つたを證據立つるは、此の年閏七月一日即ち敵艦覆沒の當日に於て、上人が曾谷入道に與へたる書（曾谷入道書一六五四）てある、

『日蓮勘文粗叶二佛意一歟、故二此一合戰既二興盛一也、此國一人人今生二一同瓔二修羅道一後生二皆入二阿鼻大城一無レ疑者也』

弘安四年辛己潤七月一日　　日蓮花押

佛ならぬ身の敵船覆沒せるとは夢にも知らずして、只我軍の益々不利ならんことのみ思惟して認めたる非國民文字、又以て上人の心術が窺はるゝては無いか。又以て小蒙古大日本國の廻章が、豫言的中の誇りなることを證し得るでは無いか。（尙ほ其の證明を後に出す）

然るに何ぞ圖らん、一朝の天風に敵軍塵殺せられて、豫て期待したる安房國は愚か九州の一角さへも差したる戰禍無くして、所謂大風の跡忽然として平定したるには、上人の驚倒寧ろ惘然である。（其の證後に出づ）。特に可笑しきは其の八月八日附（此の八月は編者の誤り歟、何となれば閏七月廿日頃には上人は敵船覆沒のことを承知して居る『後に出す富城への返書參照』故に此の日附は其の前で無くてはならぬ、蓋し閏七月の誤りか）即ち大風後に於て未だ其の覆沒の事を知らずして、光日上人への返書を認め口を極めて我國上下の慘狀に遇ふべきを述べ立たことである。今其の書を擧くるは頗る興味を覺ゆるも冗長讀むに堪えず、玆に略して其要を擧ぐ。

『例せば此の弘安四年五月以前には日本の上下萬人一人も蒙古の責めに値ふべしとも思食さず日本國に只日蓮一人計りかゝる事此國に出來すべしと知る、其の時日本國四十五億八萬九千六百五十八人の一切衆生一人も無く佗國に責められさせ給ひて其の大苦は譬へば焙烙と申す釜に水を入れて雜魚と申す小魚をあまた入れて枯たる柴木をたくが如しと申せば、あな忌々し、怕ろし、打はれ、所を追へ、流せ、殺せ、信せん人々をば田畠をとれ、財を奪へ、所領をめせと申せしかども、此の五月よりは大蒙古（前月には小蒙古と云ひ今は復た大蒙古と云ふ）の責めに値ふて、あきれ迷ふ程に、さもやと思ふ人々もあるやらん、苦々しうて、責めたくは、なけれども有事なれば當りたり當りたり日蓮が申せし事は當りたり（日徒は是をも豫言的中の誇りとは言はざるか）（中略）今御覽せよ法華經誹謗の科と云ひ、日蓮をいやしみし罰と申し、經と佛と僧との三寶を誹謗する大科に依て現生には此の國修羅道を移し、後生には無間地獄へ行き給ふべし、此れ又偏へに弘法慈覺智證等の三大師の法華經誹謗の科と達磨善導律僧等の一乘誹謗の科と、此等の人々を結構せさせ給ふ國主の科と、國を思ひ生處を偲びて兼て勘へて告示するを不レ用還て怨を成す大科』云々（光日上人返事一〇九五）

讀者諸君以て如何か思はる、與へて評すれば、所謂喧嘩過ぎての棒擔ぎ抱腹絶倒、奪て論ずれば、

此の國難に當り擧國一致戰士の後援に心力を盡し誠心誠意戰捷を祈るべきの時に於て、只法華經のみ是れ護りて其の非國民的放言斯の如し。磯野氏は『愛國觀念の熾烈なる聖人の如き者、豈に國土の上一大慘禍の横はるを目擊し徒らに自己豫言の的中を思ふて、得意がる如き態ありと思ふ可んや』と云はるゝが此一段の所論に對しても爾が云ひ得るや如何。

日蓮主義者は曰く、上人は此迄は謗法懲治の爲に絶叫警告せしかども、本是れ我國は妙法の戒壇地である故に、愈々元兵來襲するに方りては、秘かに國家衛護を祈られたてある、彼の小蒙古大日本國の文字は即ち其の精神の發露である杯と言ふと雖ども、其の小蒙古大日本の書を發する後、敵兵の益猖獗を期し敵船覆沒の當日には彼の『曾谷入道返書』を認め、今又其の數日の後に於て重ねて『光日上人返書』を書て居るでは無いか、只法華經あるを知りて國家の危急を忘れたる非國民的態度歴然たり。是でも日徒は尙ほ上人の秘密祈禱を信ぜんとすか、呵々。

之を要するに、七月三十日より翌閏七月一日に亘る天風は、全く上人の夢想にだも及ばざる所にて夫迄は上人の豫言が適中したる如く見ゆるものもありたれども、其の實は偶中にてありしこと、此の天風に至り明瞭となりたてある。嗚呼此の天風、天風は一擧我外寇を掃蕩すると同時に、上人の廿年來傍若無人の暴言を大喝一呵し去りたてある。痛快哉。尙ほ天風に關し更に述ぶる所あるべし。

一七、大風に就て

日蓮上人は文應元年に安國論を提出してより弘安四年に至る迄二十年、此の間豫言の適中せし如く見ゆたるは、自界叛逆に在りては文永九年に時宗が兄時輔を六波羅に殺せしと、他國侵逼に在りては同十一年に元房が壹岐對馬に寇せしことであつた。然るに今又元軍博多灣を壓するに見るときは、豫言着々的中せる如くなるも、吾輩は是を的中と爲さず全く偶中であつたと斷ずる者である。

試に思へ、若し豫言的中ならば上來研究したる如く元寇は全國の津々浦々に及び、特には上人の故鄕安房國迄も前年の壹岐對馬同樣の慘狀を現すべき筈では無いか。然るに事實は全く反して、全國どころか九州の一角すら格別のことも無く、一朝の天風に忽然として平定したて無いか、則ち豫言は丸外れてあつた。

實に弘安四年七月三十日よりの天風は、全く上人の意想外の出來事てあつた。上人の驚倒狼狽は思ひやらるゝである。若夫れ上人の經證が確かに事實に當るものなれば、元軍襲來の上に於て所謂他國侵逼の慘狀が起らなければならぬ、其れが一朝の天風に掃蕩し盡されては、侵逼の侵逼たる難とは成らぬである。又上人が眞に未萌を知る聖人の一分（北條時宗狀四二九）であるならば、元兵襲來

の無効に終るべきを豫め之を知る筈ではあるまいか。若又知つて而して之を秘匿し居たとすれば、大風後に於て多少其の態度に顯るべき筈と思ふ。今之が其の態度に一も顯れざるのみか、却て狼狽の狀か暴露して居る、是れ吾輩が豫言外れと斷ずる所以である。

世に此の大風を稱して神風と云ふ、蓋し以なきにあらず。大風に先つ三日、七月二十七日より伊勢內宮の別社なる風の社に變異あり、颶風忽ち起つて殿宇を飛ばし喬木を拔く、時恰も龜山天皇は畏くも身を以て國難に代らんと御祈願中であつたと聞こゆ、社の彌宜渡會貞尙荒木田尙長等連著して、九州の異狄を亡ぼさんこと今明日の間歟と報告上奏のことあり。之を古今の我歷史に徵するに、國家危急存亡に際して天佑ある〻こと一再に止らず（旅順の開城、黑溝臺の役、對馬海戰及露國の革命獨逸の潰敗悉く是れ天佑たり、其の次第恐く未だ世人の多く知らざる所別に說かん）此の大風亦之を神風と稱すべきである。然り是れ神風である、其の上人の豫想外に發する固より當然であらねばならぬ。

日蓮主義者亦同じく神風と稱す、但し彼の所謂神風は聽て又佛風である、然る所以は上人の本地垂迹說亦他宗の夫と等しければなり。是に於て可笑は前に述べたる如く上人は此の元寇は佛が隣國に命じて我國の謗法懲治の爲に出さしたと言ふて居る。然るときは佛は彼に命じて出兵せしめ、而して其兵來るや忽ち佛風を起して之を塵殺したことゝなる、佛豈に斯る無慈悲を爲さんや、呵々。

上人は常に言ふ謗法の故に天災起ると、今夫れ大風は天災にあらずや、謗法の爲に起るべき大風か今度は謗法懲治の爲に來て元軍を覆す、自家撞着之より甚しきはあらず。

偖上人が此の神風に對する態度は如何、是れ本篇の大に着目する處である。神風の後富城常忍は屢書を身延に致して、上人の意見を尋ねた樣子である。驚く可し上人は之に對して約四ヶ月（三ヶ月と二十二日）を空過して、十月の二十二日に至り始めて返書を認めて居る。之が即ち上人の大風と元兵覆沒皇軍大捷に對する唯一無二の絕筆的所見の發表であつた。其の書贅言冗雜殆んど讀むに堪えざるも、併し上人の此の際に於る心事を見るに於て頗る切要なるものあれば、主要の部分を玆に摘錄する。

今月（十月）十四日の御札同十七日到來、又去後の七月（閏七月）十五日（大風後十五日目）の御消息同二十日頃到來、其外雖レ賜二度々貴札一爲三老病一（時年六十）之上不食氣候間未レ奉二返報一候（病氣の爲に返書せずと稱するも八月二十二日治部房（七八七）へ九月十一日南條氏（六二二）へ各長文の返書を認めて居る、但し一も戰捷を賀せず、又一も大風のことに及ばず）其恐不レ少候（閏七月二十日頃敵船覆沒皇軍大捷の報に接しながら約四ヶ月の日子を空過し何等

の返書をも發せざりしに見るも、如何に上人が落膽したるかと窺はるるては無いか、常識を以て考ふれば先づ取敢へず戰捷を賀すべきでは無いか）何よりも去る後の七月御狀の內に云、鎭西には大風吹き候て浦々島々破損の船充滿の間乃至京都には思圓上人、又云く理豈然哉云々（眞言宗の思圓叡尊の男山に於る祈禱の力に依りて颶風起りたりと云ふも理豈に然らんやとの意）此事別して此の一門の大事也、總て日本國の凶事也（大風が眞言の祈禱で起つたとの說を氣にして一門の大事と云ふ、結局元寇が豫期の通りに慘狀を起さゞりしを嘆息する）仍て忍ゝ病一端是を申し候はん、是偏に爲レ失二日蓮一無らう事を造り出さん事歟て知る（私怨煩悶の情紙表に溢る）其故は日本國の眞言宗等の七宗八宗の人人の大科于レ今不レ始也、雖レ然且く擧レ一泰レ令レ知レ萬（中略、此所承久役の跡を述ぶ冗長一も時態に切ならず）イツモノ事なれば秋風に纖の水に敵船賊船などの破損仕て候を大將軍生取たりなんど申し祈り成就の由候げに候也、蒙古の大王の頸の參て候かと問ひ給べし（上人の心事が明かに見らるゝては無いか）其外は如何に申候とも御返事あるべからず、十月二十二日（富城入道書六二四）

こはその摘要であるが、其の趣意は『承久の役に宇治川增水して東軍一時進み兼たるを見て、京方には眞言祈禱の効驗と爲して喜びたる間もなく、東軍川を渡りて京都に攻入り三上皇を流し奉ったては無いか。爾來六十年末だ其の耻辱をも雪ぎ得ざるに、今又其の弟子僧等に元寇退治の祈禱を命ず、何等の効驗ある筈なし。多少風の吹きたるは秋の常にして祈禱の力にあらず、敵の大王の頸を取得たるかと反問あれ、其の外は如何に申とも返事すべからず』と云ふに外ならず。

之を要するに、大風は眞言祈禱の力にあらずと主張したるのみにて、大風の爲に敵船が覆沒したることは認めざるが如く裝ひて曖昧に附し去りたるなり。『其外は如何に申候とも御返事あるべからず』と云ふ所に、其の苦悶が能く見ゆるてはないか。

上人は已に述べたる如く、此の年六月には元兵大擧して來ると聞くや、豫言的當せりと雀躍狂喜して、彼の小蒙古大日本國の廻章を發し心大に其の說の勝利を誇り、尙ほ元寇覆沒の當日即ち閏七月一日には曾谷入道に、八月（閏七月の誤りならん）八日には光日上人に彼の如き言語同斷なる非國民的妄言を敢てし、只豫言の的中をのみ得意滿腔に敵兵の猖獗、我軍の潰敗を期したるに、何ぞ圖らん一朝の神風に敵軍忽ち覆沒し盡して俄然として平定に歸したるには、如何に豫想外、如何に驚倒せられしか寧ろ氣の毒千萬てある。是れを富城入道への返書に見るに、覆沒の顚末を聞知せる後病を稱して閉籠り狂雷の落下せし跡の如く寂として聲なく、四ヶ月の久しきを空過し入道の屢々なる催促に餘儀無くせられ、漸くにして返書に及びたるも平素の筆法揮ふに術なく、徒らに無用の贅

辨不急の閑文字を並べて不得要領の放言に紛かし、此の空前の奇勝に際し遂に一語の賀詞をも述べず、否從前放言の行掛上戰捷を賀する譯にも行かず窮地に陷り、又遂に敵船覆沒の理由にすら言及する能はず（遺文錄中神風後に於る文書に一も戰捷を賀する字無く、又一も敵兵覆沒を論じたるもの無し）。爾來一ヶ年に於る八通の文書を見るに一も力の入たるもの無く、從前とは全く豹變して文字沈着、法義の外に出てず、初は脫兎にして終は處女、斯くて病を冒して故鄉房州に行かんとして果さず（波木井書三八五）、途中池上に滯り病漸く革らんとするに及び、畢生の力を盡したる安國論は前に時宗に破られ後に神風に粉碎せられしにも係はらず、之を把つて門下に講義し日朗に屬累したりと云ふ、憫れにも亦殊勝なり。而し上人は神罰を蒙り（上人の論法に效ふ）一世の事休みて、弘安五年十月十三日（神風後十六ヶ月）行年六十一歲を以て示寂せられたり。嗟々不幸乎將幸乎。

終に云ふ、日蓮主義者の著書を見るに、其の多くは神風に至つて筆力鈍る、是れ其の自然ならざるを得ず。特に可笑しきは肝心の小蒙古大日本國云云の書を掲げず、又本篇に引く所の曾谷入道書及光日上人書の如きは隱して出さず、又富木入道への返書の如きは或は出すも其の文意內容を說明する者無し、著者の苦悶爰に至りて顯はる、亦是れ自然ならざるを得ぬと思ふ。

一八、其後我國の佛教

日蓮上人の說の如くんば、念佛禪眞言律宗等を一掃するにあらざれば、我國は無形有形俱に亡ぶべき筈である。然るに愈々國を亡ぼすべく期待されたる弘安四年の元寇は、神風一發忽ち粉碎し盡されて、上人の期待は爰に忽ち阻止せられ了つた。爾來今日に至る迄、彗星地震飢饉疫癘其の外大小災變續發して年表史上に跡を絕たず、而して又南北朝より織田豐臣德川に至るまで亂跡絕へず、戊辰役、西南役及日淸、日露、日獨の外役に及ぶ年代に在りて、上人の所謂亡國の因たる念佛其の他の諸宗は連綿として相昌へ、法華經は依然不廣宣に後五百歲を空過して、而も我國は有形は勿論無形にも亡ぶどころか只益々發展して、今や上人の夢想にだも及ばざりし世界の一等國となり、上人が小國の王と輕蔑し奉りたる我天皇陛下は、五大强國の君主と崇めさせられ、聖運隆々天日と光を同ふし給ふにあらずや。論より證據なり事實此の如くなる以上は、上人の所謂天變地天兵亂等が人事宗敎と何等相關せざるは、明白にして又甚だ鮮明なるにあらずや。

上人は謗法を論じて國家の浮沈に關すと爲すも、當初より幾回も繰返したる武將の破佛、近くは明治初年に於る神佛の整理寺院の廢合僧侶の還俗令の如き、恐らくは上人が引所の彼の會昌五年の

破佛教にも讓らざる破佛ではあるまいか、而かも我國は何等佛罰を蒙りたる跡も無く、唯發展に發展を重ねて以て今日の盛を爲したるにあらずや。吾輩は言はんとす、謗法の國には必ず五難七難起るとの佛教史上の古傳說は、天變地天等と俱に人事國運と何等關するものにあらずと。

更に問はん、上人は阿育王は南閻浮提を大體知行す杯云ふ（南條書六二二）歐米諸國は閻浮提の外と解したる乎（當時歐米等は夢にだも知らざりしならん）。這般の大戰は法華經には更に豫想せられざるか。佛教の及ばざる國は佛も一切お構ひなきか、今此三界は皆是我有其の中の衆生は悉く我子と宣言しながら、芥子大にすら當らざる地球上に於て僅かに東洋の一小區域にのみ顯現し豫言せられたるものと、上人は法華經を解せられたか、是れ獨り上人に對する疑問にあらず、佛教に對する疑問の一で無くてはなるまい。

更に安國論を把つて此の六百餘年間に照し見るに、天災地變と兵亂と念佛眞言禪諸宗と間錯雜然として幷馳し來りて、中ごろ皇室の式微はありたるも天日再び燿きて遂に維新の中興となり、天災地變何の關する所も無く、諸宗の隆汚亦更に與らず、一戰は一戰より國家は唯益々發達して底止する所無く、今や振古無比の隆盛を極むるに至りたるを見るのみ。吾輩は又言はんとす、安國論所說の如きは當時に在りては豫言的中せる如く盲目的に迎へられたれども、神風一過天下の迷夢を打破し盡して、而して六百餘年の實蹟が愈々其の的中にあらずして、一時的偶中にてありしことを證明判決して餘り無しと。尙ほ言ふ、古往今來天佑を以て進展する帝國、何ぞ斯る迷想より成る安國論如き薄弱なる理由を以て警告を受くる者ならんやと。

日蓮主義者は曰く、念佛禪眞言等が掃蕩せられずして、而かも國家が隆盛に向ふは是れ故あり、初め念佛禪眞言等が害毒を流したるは事實なるも、日蓮上人の破折を蒙りて大に反省する所ありたるを以て、彼等存するも其害毒多からずと。窮したる辯護と謂ふべし。試に思へ、念佛に對する根本折伏は彼の所謂捨閉閣抛の廢止にあらずや、捨閉閣抛にして止まざらんか、折伏は分毫も効を奏せざるにあらすや。結局上人の所謂謗法なるものが、國家と何等相關せざるや明かなり。

日女書（一一〇九）に云く、『欽明、敏達、用明の三代の國主は心には佛法釋迦如來を信じまいらせ給ひてありしかども、外には國の禮に任せて天照大神熊野山を仰ぎ參らせ給ふ。然れども佛と法との信は薄く神の信は厚かりしかば、强きに引かれ三代の國主疫病疱瘡にて崩御ならせ給ひき』

讀者以て如何と爲す、日徒現昭代に鑑みて如何。

結論

其

安國論に對する吾輩の所感は、上來述べたる所にては未だ盡きたりとは言はれぬ。然るに雅俗輻輳して此にのみ沒頭し兼ぬる。暫く茲に筆を擱き假りの結論と爲して、他日追て補足することとする。

何と云ふても、念佛が七百年來我社會に利益したるは爭ふべからざる事實である。理屈は兎もあれ滔々たる凡流の散亂心を打鎮め、比較的善道に導くには彌陀の光明裏に攝取せられ、其の慈悲に援けらるゝてふ法門が、極めて便宜最勝の適劑であると思ふ。

又奇骨ある人物の養成には禪に限ると思ふ、彼の佛光國師が電光影裡斬春風と唱へて元兵を驚かせたる如き。時宗が弟子即今大事到來と問ひ、國師が如何向前と言ふに應じて一喝し、日蓮の强辯は耳朶にも留めず元使を斬り絕を示したる雄斷の如き。楠公が明極禪師と問答して、生死交謝時如何(正成)兩頭俱截斷一劍倚天寒(明極)落處作麼生(正成)震威一喝(明極)の如き。或は快川國師が信長の兵に燒打るゝに臨み、滅却心頭火自涼と唱へ恬然として火死せしが如き。近くは山岡鐵舟、烏尾得庵、

松島善海曰、他力宗にても禪を疎外するに非ず佛門の行儀として之を修す往生の資料とせざるまでなり

勝海舟の如き氣骨稜々たる好漢を養成せんには、到底他宗の及ぶ所で無いと思ふ。併し禪は一般的ては無い、所謂生來禪機ある者の入るべき門である。

眞言宗は敎義秘密にして、吾人が單に大日經金剛頂經蘇悉地經等を讀過した位で印眞言の極意は分らぬ。門外漢の學ぶに便ならざる所ありと雖ども、大體上に於て我社會を益したること、蓋し尠からず、固より當機の爲めに無かるべからざる宗旨と思はる。

律は即ち勝行の根本、無律の禪那三摩地は野狐に墮す、而して三味は佛敎の本源で無ければならぬ。凡そ佛典を繙けば佛は必ず三味より起ち其の發得せる法界の眞相を演說せらる。故に三味を離れて佛敎は無しと言ふを得ん。吾人佛敎を學ぶ者多少に係はらず、三味と相伴ふにあらずば、眞の法味は味はへぬと思ふ。佛敎を信ずる人にして三味即靜慮を無視せば、人にして精神を輕んずる程の間違てあると思ふ。尤も他力宗の如きは盡く然りとは云はぬ。

中古以來の公案は禪の變則である、未法禪とでも言ふ可き乎、白隱禪とでも稱すべき乎、佛敎の本體たる原始禪とは大分其趣きが異て居る樣に見ゆる、併し人物養成上に特効あらん。

之を要するに人は其の顏色の異なると同一に性欲亦無量なるが故に、佛が應機說法せられし如く各宗各派の存するあつて各其當機を收容敎化する必要ありと思ふ。各宗各派の簇起せしは蓋し人生

自然の要求に應ずるに似たるものあり。又如何なる宗教にても一方の碩學者出るは自然であれば、宗旨派別は起るが當然であると思ふ、則ち之が丁度亦性欲無量の衆生の何れかに適應する譯となるのであらう。我憲法は信教の自由を許してある、何の顧慮か要せん、各自其の好む所に從ひ各宗各派に歸投すべきである。吾輩は常に思ふ十二因緣より考ふるときは、同一人が同一の家に再生する譯にもあらざれば、世襲的に宗旨の定まつて居る道理はあるまいと。佛教は漸次向上の法であることは經釋共に說かれて居る。終局の歸命は釋迦佛である、現世の願は肉血を離れんとするである、成効の遲速は各自の機根に依る、因果應報は佛教の根本原理、諸惡莫作衆善奉行は佛教の結論である。先づ其心を正ふして人生の四苦を脫れ勇猛精進して菩薩乘たる法華經に入るべきである（吾輩の觀たる法華經は別に說あり）。吾人茲に悟る所あれば、何ぞ日徒の墮地獄の恐嚇に臆せんや。

其二

吾輩が安國論に反對する概要は、已に述ぶる通りであるが、其の內最も念頭に切なるものを二三條列して見よう。

一、建國以來の國難に方り、天皇は畏くも身を以て國難に代はらんと祈願あらせらるゝ際國民に敵愾心を發さしむべく指導せず、却て軍國に大禁物なる恐怖心を懷しむる如き放言をのみ敢てせしは、如何に考ふるも反對せざるを得ず。

二、僅かの天照大神正八幡なんと申すは此國には重けれども、梵釋日月四天に對しては小神ぞかし（日蓮は）敎主釋尊の御使なれば、天照大神正八幡宮も頭を傾け手を合せ地に伏し給ふべき事也。

大蒙古國より此國を攻むるならば、天照大神正八幡とても安穩にをはすべきか。

隱岐の法皇は名は國王身は妄語の人也。橫人也

彼國の大王は此の國の神に勝れたること明かけし。

八幡大菩薩は應神天皇小國の王也。阿闍世王は摩竭大國の大王也、天と人と王と民との勝劣也

八十一（安德）八十二（後鳥羽）八十三（土御門）八十四（順德）八十五（仲恭）の五王は、或は西海に沈み或は四海に捨られ、今生には大鬼となり後生には無間地獄に落給ひぬ。

安德天皇と申す大王、眞言師等數百人をかたらひ、源右將軍賴朝を調伏せしかば還着於本人として西海に沈み給ふ。

日蓮は當帝の父母、念佛者禪衆眞言師等が師範なり又君主なり。

日蓮屢々言ふ上一人より下萬民に至る迄地獄に墮つ、云云。

三、他宗の寺塔を燒き高僧を由井濱にて斬れと上言す。

以上諸項は之を讀で憤慨せぬは帝國の臣民にあらず、而して皆是れ安國論の趣旨より來る所の暴言である。吾輩は思ふ安國論は一種の危險思想とも言ひ得べく、決して國家に穩健忠實なるものでないと、反對せざるを得ぬ所以である。

其三

日蓮上人は如何なることを爲した人であるかと云へば。

先づ諸宗の敎義を研究して法華經を第一と決定し、天親菩薩が唱へ始めたと云ふ南無妙法蓮華經の題目を以て宗旨と定めた。

次に天災地變飢饉疫病に感ずる所あつて之を經證に得、謗法の國には五難七難必ず起ると信じた。

是に於て謗法者を吟味して、法然上人が曇鸞道綽善導の謬釋を引きて造つた選擇集の爲めに、全國が念佛と爲つたと論じ、法然を謗法の第一人と決した。

次に眞言宗の善無畏金剛智が天台の一念三千の法門を盜だと論じて、弘法大師を謗法者の第二人と決した。

此の二人を中心として、更に禪宗の根元が正當の佛說で無いと爲し、又律宗は法華經を邪敎天魔の所說と爲したるを咎めて（聖愚問答鈔二二五）、之を加へ以て次の主張を爲すに至つた。

『念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊』

而して之を經證に照して立正安國論を造り、早く此の四宗を禁じて法華經の國と爲さゞれば、自界叛逆他國侵逼難が來りて日本國は必ず亡ふと主張して、之を鎌倉幕府に獻言した。

然るに其獻言は容れられず日蓮は伊豆に又佐渡に流された。それで日蓮の題目主張は佐渡が中心となつて、自稱の法華經行者となり上行菩薩の再生と自信し、天照大神よりも尊貴なりと思ふに至つた。

赦免せられて鎌倉に歸り、又前言を繰返したるも容れられず、去て身延山に入つた。

日蓮遺文錄に載する開目鈔本尊鈔外三百七十五篇は、皆以上の事を縱橫に論じたるに外ならぬ。

編者云く、此書印刷校正に際しては、著者の檢閲を經る筈であつたのが、時歲末に近づき短時日の間に刷り上げざるを得ざることゝなつて、その遺なく、又句點の如きも編　の勝手につけたので誤謬あるやも保し難い、他日重版の折正すことゝせん、讀者諒焉

未來世に於て、若し善男子善女人あつて、如來の智慧を信ぜん者には、當に爲にこの法華經を演說して、聞知することを得せしめよ。その人をして佛慧を得せしめんが爲なり。若し衆生あつて信受せざらん者には、當に如來の餘の深法の中に於て示敎利喜せよ。汝等若し能く是の如くせば、則ちこれ己に諸佛の恩を報ゆるなり。

（法華經囑累品）

大正十年十二月廿二日 印刷
大正十年十二月廿五日 發行

著作者 竹內正策
發行者 小林定禪 東京市淺草區松葉町百十三番地
印刷者 牧田博司 靜岡縣沼津町城內字添地三〇九ノ一
印刷所 沼津印刷所 靜岡縣沼津町字城內添地三〇九ノ一
發行所 金剛社 東京市淺草區松葉町百十三番地

落